

中國文教科書

卷九

東京
光風館藏版

見本
中華書局

3759
Y019
資料室

41733

教科書文庫

4
810
41-1931
200030
2042

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

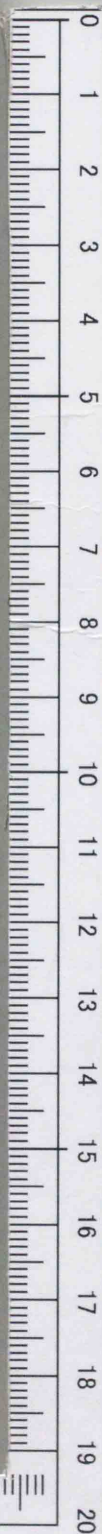


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

275.9
Y019

文部省檢定濟

昭和三十六年十二月二十二日 中國語文教科用

吉田彌平編

中國文教科書

卷九

東京 光風館藏版

學・中
國文教科書 卷九

目次

一	明淨直	五十嵐 力
二	舊都の春	藤岡作太郎 三
三	幻住庵の記	松尾芭蕉 五
四	落花の雪	〔太平記〕 四
五	百蟲譜	横井也有 三〇
六	近代文學の一生面	岩城準太郎 四
七	草枕	夏目漱石 四

目次



八	新島守	〔増鏡〕	五
九	かぐや姫	〔竹取物語〕	六
一〇	八朶の芙蓉	土井晩翠	七
一一	待賢門の戦	〔平治物語〕	九
一二	小松内府	〔平家物語〕	九
一三	寺子屋	竹田出雲	一〇
一四	科學者と藝術家	吉村冬彦	一六
一五	狩野芳崖	岡倉覺三	一八
一六	吾妻下り	〔伊勢物語〕	一七
一七	隅田川	〔觀世流謠曲〕	一三〇
一八	石濱の雨	加藤千蔭	一四二

一九	芳宜園大人	村田春海	一四四
二〇	大原御幸	〔平家物語〕	一四
二一	愚禿親鸞	西田幾多郎	一五
二二	月の前	上田秋成	一六
二三	水戸學の精神	深作安文	一六
二四	大丈夫の覺悟	幸田露伴	一八四

目次終

中國文教科書卷九

五十嵐力

國文學者
文學博士
早稻田大學文學
部長
明治七年山形縣
米澤生

一 明淨直

五十嵐 力

文武天皇が即位の際に下された宣命の中に、左の御詞がある。
是を以て、百の官人等、四方の食國を治めまつれと任せ給へる
國々の宰等に至るまでに、天皇が朝廷の敷き給ひ行ひ給へる
國の法を過ち犯すことなく、明き淨き直き誠の心もちていや
すゝみすゝみて緩み怠ることなく、務め結りて仕へまつれと
詔り給ふ大命を諸、聞食さへと詔る。(續日本紀卷二)
吾等は、此の宣命に在る「明き淨き直き」心といふのが、日本人の性

質の核となり、中心となるものであらうと思ふ。此の語は代々の詔勅に幾度も繰返されてゐる、而も重きをおいて繰返されてゐる。世に大和民族の特性と稱せられる現實・光明・活動・向上・中庸・快活・忠孝・清廉・勇武・義俠・風雅等の諸性質は、概ね此の明・淨・直の三大性を基本として説明されるらしく、殊には三種の神器が此の三大性の標章として遺憾なきやうに思はれる。詳論の餘地がないから、勢、抽象的に流れるが、一通り其の理由を説かう。鏡の性は明、其の徳は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は鏡のやうな明き心を以て正しく事物を觀た。故にその見方は概して公平無私で、白い物は白とし、黒い物は黒とし、善行に對しては我を忘れて歎美し、悪行を見ては敢然として排斥するといふ風であつた。天照大御神は、鏡を齋きて我を見るが如くせ

よ。」と仰せられた。全國無數の神社にはその鏡が神體として齋かれてある。詔勅や祝詞や君臣應對の詞などに「明き心」といふ語が澤山に用ひてある。是等はいづれも、此の性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據になると思ふ。

我が國民の中庸性・折衷性・調和性も、一面此の根本性質の結果であらう。我が國には政治・社會・宗教等の各方面に互つて、諸外國に見るが如き非常な大衝突が無い、無いではないが割合に少なく、又いつもよいほどに切りあげて調和するといふ傾がある。例へば、異主義が新に外國から入つて來る。毛色がかはつてゐるので、暫くは争ふが、やがて御互に道理も無理もあることが解ると、馬鹿らしくして争論が續けられなくなる、そこで騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事此の通り

兩部習合

眞言宗の金剛界
胎藏界の兩部の
諸尊を我が國の
諸神にあてはめ
て佛は本地神は
垂迹と説く神佛
同體の説

である。まづ儒教が入つて來た。至つて尤もな事をいふから、早速それを頼んで我が固有の倫常に理窟をつけて貰ふ、かくて儒教は長へに我が國風の忠實なる辯護人となつた。佛敎が入つて來た。餘りに奇怪なので、暫く押問答がある。やがて説き方の巧妙なのに打込むと、何等の芥蒂なく中心から歸依してしまふ。かくて遂に兩部習合といふ巧妙な調和案が成立つた。武家の世になつては、佛敎を餘興扱にして、老後の慰め、助命の口實とする様になつた。徳川時代になつては、禪の修行に武士ほど都合よきものはなしなどと、釋迦如來の夢にも見ぬ調和説を唱へる高僧が現れた。基督教も二三度の喧嘩が濟んでもうそろそろ日本のものに成りかけて來てゐる。あの位の騒で明治の維新が成就したのも、平和の裡に憲法が定められたのも、君臣

陣中篝火の下に
島津義久の臣新
納忠元の故事
敵ぞとて
これも新納忠元
の歌

父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではないか。馬上に天下を得た武將が文藝の奨勵に骨折るのも、群雄割據の亂世に、陣中篝火の下に古今集を讀み、又「敵ぞとて何かは人の憎からむ、同じ御國の同じ身なれば」と詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡すのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、皆一つは事を見ること明かに、理に従ふこと流るゝが如き根本性によるのではないか。大和民族は十字軍や佛蘭西革命の如き極端な狂言を演ずるには餘りに心が明る過ぎる傾がある。吾等は日本人を「公正」といひ、理に鋭し。」といひ、感情の平靜を保つ。」といひ、日本人は何事をも受け容るゝ胸懷洞然たる民族なり。」といつた外人の評が、決してでたらめの空世辭ではないと思ふ。

清淨の徳は玉に於て絶好の標章を得て居る。淨と明とは似てはゐるが、同じではない。其の違ふ趣は、丁度鏡と玉との違ふ趣に似てゐる。汚穢溷濁を忌むことは清明共に同様であるが、清はそれ以上に味ひあり温かみあることを要する。譬へば、鏡は空白にして正しく物を映せば足るが、玉は必ずしも空白物を映すを要とせずして、温潤の光、圓融の相、澄澈の趣あることを要するが如きものである。本來日本人は明かに事物を観る長所があるのみならず、外物を観るにも、自己を發表するにも、一種の味ひある態度を具へてゐた。其の明は空白の明ではなくして、温潤・圓融・澄澈の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくして、水晶・夜光の珠の明である。我が國には古來禊祓が多く行はれ、廣く用ひられ、且重要視されてゐた。祝詞・宣命を始めとして多く

の歌詠諷謠は、明き心を現しながら趣味・風韻に富んでゐた。而も其の趣味や形容に諸外國例へば支那の文學に見る如き張子の虎のやうな誇張の弊がなくて、よく其の實を現し、中味にふさはしい修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも戰陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は兜に香を焚きしめるといふやうな嗜があつた。上流社會は言ふに及ばず、市井の民に至るまで、それぞれふさはしい文學をもつてゐる。外國出稼の労働者は、其の日の生活に窮しながらも、猶一二の植木鉢を持たぬはなく、而してこれは外國の労働者に絶えて見ぬ所だといふことである。大工・指物屋の手に成るはかなき家具や細工物も、西洋のが表面のみ美しく、裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えぬ裏面まで手を盡すといふ嗜があるといはれてゐる。是等は何れも大

和民族の清きを愛する根本性の現れたものではないか。吾等は日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至るまで皆美術を愛翫す。といった一外人の批評が必ずしも虚妄でないと思ふ。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前勇往を意味する。其の厭ふ所は躊躇緩慢首鼠兩端である、曲ること、拗ること、邪なることである。叢雲の劍は其の標章として此の上なくふさはしい。元來直の徳の本領は、心の明かに見た所に向つて直前するにある。若し右の三徳を一括してこれを一體と見れば、明は其の靜的方面即ち知の方面で、直は動的方面即ち意の方面である。知の明かに見たる所をば意が直進して實現する、而して知の見方、意の働き方に、潔くして言ひしらぬ味ひのあるのが、邦人

父母を
山上憶良の令
反「戀情」歌の句

海行かば
大伴家持の賀
陸奥國出レ金詔
書「歌」の句

固有の性格ともいふべきであらう。明き心を以て、父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし愛し、故にその明き心の示す所に従ひ、直前して父母に事へ、妻子を愛しむ。君を仰げば、八隅知し大君「現つ神」として國に臨み給ふさまに限なく高く貴い、故に直前して「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」の獻身的奉公を效す。此の通りである。而して其の君父に事へ妻子を愛するや、多くは水臭い思慮分別利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。此處が眞淵宣長等の國學者が感歎し自負して措かなかつた所である。無論何處の國にも文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の所があつたであらう、又日本民族にも利害勘定の行爲が無かつたとはいはれぬであらう、又自然直實の行爲に弊害が伴なはぬともいはれぬであらうけれども、我が民

族の特長の一面は、とにかく此處に在つたやうに思はれる。其の例は、遠い昔では須佐之男命、勝ちすさんでは前後を顧みず、皇祖に存分のいたづらして高天の原を震動させられる、罪され、ば命を畏みて邊土に行かれる、出雲では櫛名田姫の不幸を見て、危険をも顧みず、すぐに八俣の大蛇を退治される、寶劍を得ると、これを囊あたまに敵あたまなうた天照大御神に上られる。やり方がいかにもはきく、きびくとして、直斷決の文字そのまゝのやうではないか。次いで日本武尊、相手を搦なみ批ひいて、手足を引つかいて、薦いに裏うんで投棄なてるといふ勢の方でありながら、一たび詔を承れば、劍に仗り、千里を獨往して東西の兇賊を平げられた。これ亦須佐之男命系統の勇者である。それに續いては、鎮西八郎爲朝が、腕白勘當、九國押領、召還、保元の勇戦、大島配流の一生、これ

ヒーロー

Hero
勇士

千萬の

萬葉集にある高橋連蟲麿の歌

曾我五郎

名は時致

朝比奈三郎

名は義秀

金平淨瑠璃

江戸時代の初期

に流行した淨瑠璃

坂田金時の子金平といふ怪力のある架空人物を主人公としたのが名の起り

も須佐之男命系の大立者。是等は何れも向ふ見ずの亂暴者でありながら、妙に情に厚い所があり、君父の事とあれば水火をも辭せず、直前するといふ風がある。直斷決、勇の權化で、たしかに大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローである。其の他、蒙古の來寇に際して、西海の將士が身命を棄てて防戦した態度を見よ。古の勇士が、

千萬の軍なりとも言擧げせず取りて來ぬべきをのことぞおもふ

斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠、加藤清正の如き竹を割つたやうに正直な豪傑が國民に尊崇さるゝを見よ。曾我五郎、朝比奈三郎の如き一徹者が國民に愛さるゝを見よ。豁然大悟の禪宗が盛に行はれたるを見よ。おつと出せばやつと受ける金平淨

瑠璃が流行した趣を見よ。眞偽は知らねど、正直は一旦の依怙に非ずと雖も、終に日月のあはれみを蒙る、謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰にあたる。といふ戒が、天照大御神の御言として神道家に唱へられてゐた。「武士は七息思案」といふ格言があつて、分別も久しくすればねまる、武士は物事手取早にするものぞといふ事が、武士道の金戒になつてゐた。是等はいづれも直きを好む性質が大和民族の心性の基本精髓を成してゐる證據である。(新國文學史)

二 舊都の春

藤岡作太郎

遊子學んで二十餘年、たゞ惑に溺れ、
既に現在に飽いてまた當來を懼れ、

藤岡作太郎
國文學者
文學博士
東京帝國大學文
科大學助教授
加賀國金澤生
明治四十三年卒
年四十一

祇園 京都市東山區八坂神社
清水 祇園の南にある清水寺
三の峰 五條の東
山 京都市伏見區深草町にある稻荷山
男山 京都府山城國久世郡八幡町にある山
石清水八幡宮がある

疑懼煩悶、衣食も安からず、
ひとり一個の笠に苦みの頭を包みて、
千年年毎に新なる舊都の春にさまよへば、
柳綠花紅更にわが胸を傷ましむるかな。
比叡の麓にわたれる霞は、近く春風に匂ひ、
愛宕の嶺を越せる雲雀は、俄かに脚下に墜つ。
指さす方に繪と見ゆる祇園、清水、三の峯、
塔影小さきところ、色ほのかなる男山。
麥隴菜畝、歴史の印を残さざるはなく、
無常迅速、いづれも涙の跡なるよ。

法成寺
藤原道長の建て

た寺
隱僧

兼好法師
木幡

京都府山城國宇治郡宇治村の内
伏見と宇治との

間の里
藤原氏の墓の多

くある處
沙羅雙樹

祇園精舎の鐘の
聲諸行無常の響

あり沙羅雙樹の
花の色盛者必衰

の理を顯す
(平家物語)

六波羅殿
平家の邸

鴨河の東五條六
條邊にあつた

安養淨土の法成寺もあはれこの浅茅原と、

雙なごびが岡の隱僧が昔語りも夢なれや。

木幡こはたの外山松柏空しく薪と摧かれぬ。

二十年の榮華は沙羅雙樹の花の色。

六波羅殿は唯洛東に名を留むれども、

慘澹たる經營蜻蛉の命と共に何か残

れる。

金城鐵壁の迹桃の花うつろひて、

春草萌ゆる處たま〜瓦片ぞ散りほ

ひたる

伏見桃山幽鳥の囀るに任せて、



京都から見た東山

四海併呑の雄圖も淀の水泡と消えたりや。

あゝ英雄の事業大は即ち大なれど、

「時」の前にはたゞ風前の燈火。

悲しきかな、生滅の鬼は日に〜人を餌として、

惠も罪も愛も望も旭の霜と解け去りぬ。

英傑の遺業消ゆるは卒都婆の文字より早ければ、

爲すなき一生、あなはかなしや。

秋風吹けば、梢の木の葉ちり〜に、

互に急ぎ相逐ひて、もとの土にぞ歸るなる。

消ゆる待つ間の露とこの身を思へば、

卒塔婆
Stupa
梵語

恐は刻々にわが肉を削り去り、
 すわる茵はうき雲の絶えずぞ揺るゝ。
 いづこか驕傲なる「時」のかひなさを嗤ひ、
 永劫の片はしをわが隠れ家として、
 不變の叫に慰樂の聲を求むべき。

宇治の浮舟流るゝ跡の消ゆるごと、
 はかなく過ぎし五十餘帖の物語、
 やさしき筆をたどりにし主は淑女の名のみして、
 若紫の色はあせ、匂は残る九百年。
 緋く人はあやしく墨の香に酔ひて、
 わが身をもうき世の事をも忘るなる。

補陀落や

補陀落や岸打つ
 波は三熊野の那
 智の御山にひび
 く瀧つ瀬(那智
 觀音御詠歌)

東寺

京都九條にある
 眞言宗の本山

遍照金剛

空海の灌頂號

わが世を捨てて文學の野に分け入れば、
 樹々も千草も花咲亂れ、實なりこぼ
 れ、
 くしき女神の眞玉なす手に招くなる。
 時もや過ぐる、世もや歷る、常なき事の忘ら
 るゝ、蓬萊瀛洲もたゞ詩人の想より。
 人こそ朽つれ、筆の命毛永くこそ。

「補陀落や岸うつ波」とくりかへす
 東寺の禮讚、振鈴聲すみて、そゞろ涙ぞ進むなる。
 幾千人か祈るなる「遍照金剛」の聲々の



東寺

一息づつに大師の御姿現るゝ、
この世の限なり出でん人の心に刻まるゝ、
尊き碑時の嵐もいかにせん。

英傑は我のみ立てて世人を土埃と散らし、
大聖は我を空しうして世人の爲に棄つ。
英傑死すれば、世人は背き去つて顧みず。
大聖世を去れども、世人は幾度もまた大聖たり。
生死流轉はわが前に雲煙よりも淡く、
眞如實相の月ぞ長へに明かなる。

宗教は秋山の下水壯夫、文學は春山の霞壯夫。

松尾芭蕉

伊賀國上野生
元祿七年(三三〇)
歿

石山

滋賀縣近江國滋
賀郡石山村石山

岩間

石山村南郷

國分山

石山村國分にあ
る山

國分寺

聖武天皇の天平
十三年(四四)頃
諸國に創建

翠微

謂ふ未レ及ニ頂上ニ
在リテ旁陀之處ニ
山氣青緑色、故
名ニ翠微。(爾雅
の疏)

光を和げ

和ニ其光ニ同ニ其
塵ニ(老子)

これは櫻花の散りては年々に色鮮かに、

かれは常磐の松の千歳も數ならず。

濁れるを清くし、疑へるを信ぜしめ、

うたかたの世より無限の仙境に誘ふ。

あはれはらから、この同胞よ。(東圃遺稿)

三 幻住庵の記

松尾芭蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分
寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登るこ
と三曲二百歩にして八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像と
かや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部光を和げ、利益の
塵を同じうしたまふもまた貴し。日頃は人の詣でざりければ、

曲翠
芭蕉の門人
近江國膳所生
五十年や、近き
身

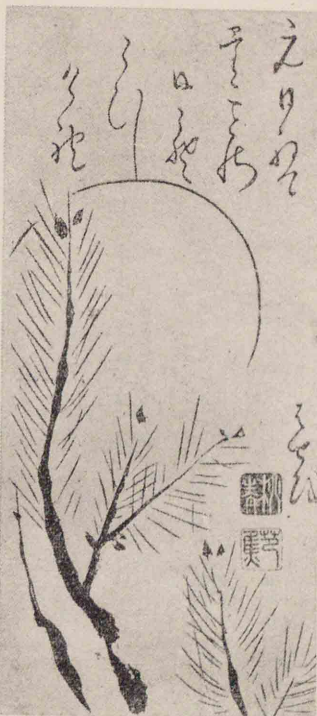
元祿三年(三五〇)
芭蕉四十七歳

筆蹟
はせを
元日はたことの
日こそこひしけ
れ

象潟
秋田縣羽後國島
海山の西北麓に
ある名所

鳩の浮巢
かいつぶりが蘆
の枯葉などで作
つた水上の巢

やがて出でじ
吉野山やがて出
でじと思ふ身を
花散りなばと人



芭蕉筆蹟

いとゞ神さび、物しづかなる傍に住捨てし草の戸あり。蓬根笹
軒をかこみ、屋根漏り、壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵と
いふ。あるじの僧
何がしは勇士菅沼
氏、曲翠子の伯父に
なん侍りしを、今は
八年ばかり昔にな
りて、正に幻住老人

の名をのみ残せり。
予亦市中を去ること十年ばかりにして、五十年や、近き身は蓑
蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟さかたの暑き日に面をこが
し、高砂たかさね子歩み苦しき北海の荒磯に踵を破りて、今年湖水の波に

や待つらむ

(西行法師)

吳楚東南に走り

昔聞洞庭水。今

上岳陽樓。吳楚

東南城、乾坤日

夜浮。……

(唐の杜甫)

瀟湘・洞庭

惠宗煙雨歸雁。

坐我瀟湘洞庭。

欲喚三扁舟、歸

去。故人道是丹

青。

(宋の黃山谷)

笠取

京都府山城國宇

治郡笠取村笠取

石山の西南十二

軒

三上山

近江富士

石山の東北二十

四軒

土峯

富士山

漂ふ鳩の浮巢の流れ留るべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端葺
きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月の初め、いとかりそめに
入りし山の、やがて出でじ」とさへ思ひそみぬ。
さすがに春の名残も遠からず、躑躅咲きのこり、山藤松にかゝり
て、時鳥しばゝ過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、啄木鳥
のつゝくとも厭はじなど、そゞろに興じて、魂は吳楚東南に走り、
身は瀟湘洞庭に立つ。山未申にそばだち、人家よきほどに隔り、
南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高嶺
より辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。笠取
に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に
水雞のたゝく音、美景物として足らずといふことなし。中にも
三上山は土峯の傍に通ひて、武藏野の舊き住家も思ひ出でられ、

古人

猿丸大夫
墓は田上山の麓
にあるといふ

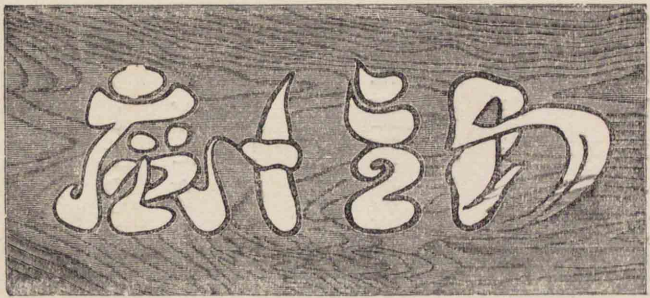
海棠に

徐老海棠巢上。
王翁主簿峯庵。
(宋の黄山谷)

とくくの雫

とくくと落つ
る岩間の苔清水
汲みほすほども
なきすまひかな
(西行法師)

田上山に古人をかぞふ。



幻住庵の額

なほ眺望隈なからんと、後の峯に這上り、松の棚つくり、藁の圓座を敷いて猿の腰掛と名づく。かの海棠に巢をいとなみ、主簿峯に庵を結べる王翁、徐佺が徒にはあらず。たゞ睡癖山民となりて、孱顔に足をなげ出し、空山に風を捫つて坐す。偶、心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくとくの雫を侘びて一爐の備いと輕し。はた昔住みけん人の殊に心高く住みなして、巧みおける物ずきもなし。持佛一間を隔てて夜の物を納むべき處など聊かしつ

高良山

福岡縣筑後國三
井郡高良山神宮
寺

甲斐何某

藤木甲斐守教直
寛永時代の書家
慶安二年(三三九)
歿
年六十八

岡兩

岡兩問景曰、曩
子行、今子止。曩
子坐、今子起。何
其無特操與。
(莊子)

らへり。さるを筑紫高良山の僧正は賀茂の甲斐何某が愛子にて、此の度洛に上りいまそかりけるを、或人をして額を乞ふ。いと易々と筆を染めて幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢といひ、さる器貯ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝は稀々とぶらふ人々に心を動かし、或は宮守の翁、里の男どもも入りて、猪の稻食荒し、兎の豆畑に通ふなど、我が聞知らぬ農談に、日已に山の端に懸れば、夜坐靜かに月を待ちては影を伴なひ、燭を乗つては岡兩に是非をこらす。

かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隠さんとはあらず。や、病身、人に倦んで、世を厭ひし人に似たり。つらつら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の

樂天

唐の詩人白居易の字

會昌六年(八五〇)歿

年七十五

老杜

唐の詩人杜甫

太曆五年(四三〇)歿

年五十九

落花の雪

またや見む交野のみの櫻狩花の雪ちる春の曙

(藤原俊成)

交野

大阪府河内國北河内郡交野村

紅葉の錦

朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき(藤原公任)

地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、この一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。愚賢文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖處ならずやと思ひ捨ててふしぬ。

まづ頼む椎の木もあり夏木立 (芭蕉全集—猿蓑集)

四 落花の雪

落花の雪に踏迷ふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも旅寢となればものうきに、恩愛の契淺からぬわが故郷の妻子をば行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし九重の帝都をば今を限と顧みて、思はぬ旅に出

逢坂の

逢坂の關の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒(紀貫之)

うねの野

近江より朝立ちくればうねの野に田鶴ぞなくなる明けぬこの夜は(古今集)

時雨も

白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

(紀貫之)

なるみがた

小夜千鳥聲こそ近くなるみがたかたむく月にしほや満つらむ(藤原季能)

でたまふ心の中ぞあはれなる。

憂きをばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱。沖を遙かに見渡せば、しほならぬ海にこがれ行く身をうき船の浮き沈み。駒もとゞろに踏みならす瀬田の長橋打渡り、行きかふ人にあふみぢや、世をうねの野に鳴く鶴も子を思ふかとははれなり。時雨もいたくもり山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても涙に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間にもおいそのもりの下草に、駒を留めて顧みる故郷を雲や隔つらん。

番場醒ヶ井柏原。不破の關屋は荒れはてて、猶もるものは秋の雨。いつかわがみのをはりなる熱田の八劍ふし拜み、汐干に今やなるみがた。傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の末

は何處ととほたふみ、濱名の橋の夕汐に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれとゆふぐれの晩鐘鳴れば、今はとて池田の宿に着き給ふ。

旅館の燈幽かにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて天龍川を打渡り、さやの中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そのとも知らぬ

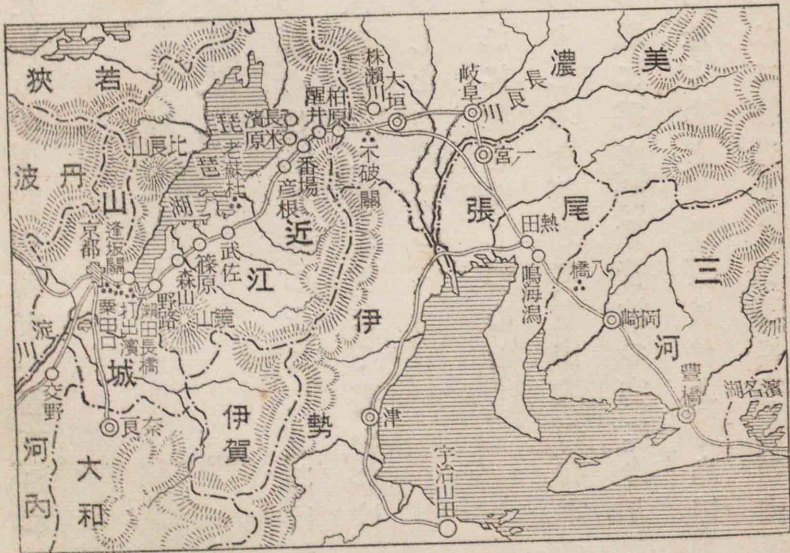


後基朝臣

命なりけり
年たけてまたこ
ゆべしと思ひき
や命なりけりさ
やの中山
(西行法師)

夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ、二度越えし跡までも羨ましくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日已に亭午にのぼれば、餉進らす程とて輿を庭前に昇きとむ。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。と答へければ、承久の合



東下沿道

宗行卿
中御門中納言藤原宗行

南陽縣菊水
南陽縣有_二甘谷_一。谷中水甘美。上有_二大菊_一。落水、從_レ山流下。得_二其流液_一。谷中人家飲_二此水_一。上壽百二十、其中百餘歲、七八十者則爲_レ天。
(風俗通)

戰の時、院宣書きたりし咎に因りて、宗行卿關東へ召下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水、汲_レ下流_一而延_レ齡_一。

今東海道菊川、宿_二西岸_一而終_レ命_一。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとまさらけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の

おなじながれに身をやしづめむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鶴首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。島田藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛裏枯れて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を

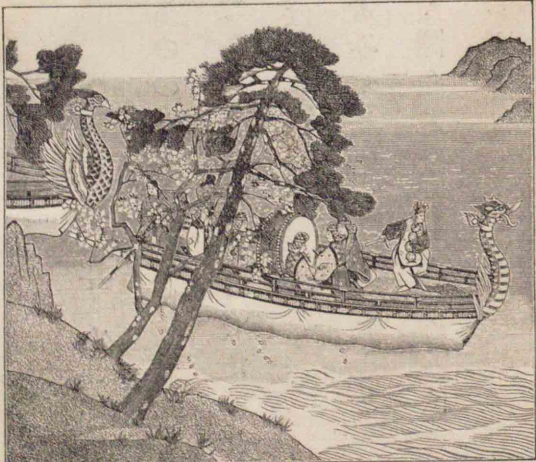
夢にも人に

駿河なる宇津の山邊のうづみにも夢にも人の逢はぬなりけり
(伊勢物語)

上なき思

富士のねの煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり
(藤原家隆)

越行けば、蔦蔓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の住む所を覓むとて、東の方に下るとて、夢にも人の逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守にいと涙を催され、向ふはいづこみほが崎。興津蒲原打過ぎて富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見えて浮島が原を過行けば、汐干や浅き、船浮きて、おりたつ田子のみづからも浮世をめぐる車返。竹の下道行きなやむ足柄山の峠より大磯・小磯見下し



龍頭編首の船
松岡映丘の筆

横井也有
俳人
名古屋藩士
天明三年(一八四三)
歿
年八十二

莊周
支那周代の思想家

莊子の内篇はそ
の著であらう
昔者莊周夢爲胡
蝶、栩栩然胡
蝶也。自喻適
志與、不知周
也。俄然覺、則
蘧然周也。不
知周之夢爲胡
蝶、與、胡蝶之夢
爲周與。(莊子)
古今の序
花に鳴く鶯水に
住む蛙の聲を聞
けば生きたし生
けるものいづれ

て、袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれども、日數積れ
ば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。(太平記)

五 百蟲譜

横井也 有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限なるべし。それも啼
く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめてたけれ。
さてこそ莊周が夢もこのものには託しけめ。
蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸
なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池にとん
で翁の目覺したれば、このもののこと更にも謗りがたし。
蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。や、日ざかり
に鳴きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。されば初蝶とも初蛙

か歌をよまざり
ける(紀貫之、古
今集序)

古池
古池や蛙飛込む
水の音(芭蕉)

やがて死ぬ
やがて死ぬけし
きは見えず蟬の
聲(芭蕉)

筆蹟
梅の散るあたり
や炭のあき依
七十九翁蘿隱

貧の學者
晉車胤貧不常
得油。夏月練囊
盛數千螢火、照
書以讀之。以レ
夜繼日。(晉書)

ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大
きなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上
は翁の一句に盡きたりといふべし。
螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水にとびか



横井也 有 筆蹟

ひ、草にすたく。五月の闇は只このものの爲にやとまでぞ覺ゆ
る。然るに貧の學者に捕へられて油火の代りにせられたるは、
このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは
殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

蜉蝣

長生無_レ得_レ者、舉

世如_二蜉蝣_一

(唐の白樂天)

蓼食_レふ蟲

蓼蟲忘_レ辛_一

(左思)

槐安の都

淳于棼、醉夢入_レ

大槐安國、見_レ王

王曰、吾南柯郡

屈脚爲_レ守、凡_二

十載、使者送出_レ

穴、遂寤、尋_レ古

槐下蟻穴、乃槐

安國、又一穴直

上、南枝、即南柯

郡也。(異聞集)

千丈の堤

千丈之堤、以_レ蟻

蟻之穴、潰

(韓非子)

茅蝸は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならん。つくくほふしといふ蟬は、つくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。」と世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。

蜉蝣ははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の謗となれり。

同じ實の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。

蟻は明暮に忙しく世の營みに隙なき人に似たり。東西に聚散

し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都を逃れてその身の安き

ことを得ん。さるも、使あしき方に穴をあけて千丈の堤を崩す

べからず。

蠅螂の斧

欲_レ以_二蠅螂之

斧_一、衆_レ陸車之

隆_一。(漢の陳琳)

原

東海道の宿

今の静岡縣駿河

國駿東郡原町

吉原

東海道の宿

同國富士郡吉原

町

蠅螂の瘦せたるも、斧をもちたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるを以て名に呼べり。松蟲のそ

の木にもよらで、いかでかく名を附きたるならん。毛生ひ、むく

つけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一在所に二

人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。こ

れ松蟲の類なるべし。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕、始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく残りたるは、淋しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊遣焚く里の煙など、且は風雅

竹林の七賢

嵇康

阮籍

山濤

向秀

劉伶

阮咸

王戎

岩城準太郎

國文學者

奈良女子高等師範學校教授

富山縣生

の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。(鶉衣)

六 近代文學の一生面

岩城準太郎

明治の末、早稻田文學を中心として自然主義の作品が相尋いで現れ、現實暴露の文學が盛に行はれてゐた頃、「三田文學」と「白樺」が發刊せられた。前者は享樂耽美の傾向があり、後者は理想的、人道的の傾向があつた。或者は汎愛的で、汎く全人類の幸福を目標とする。或者は過去の文學に見えた社會狀態の中で好ましいものを、今日自分自身に實現しようとする。或者は、同様の要求から、異國情調の世界を建立しようとする。或者はこの實人生を藝術化して、その技巧的の感興を味はふといふ事に生活

の意義を見つけようとする。しかし、これを通觀すると、何れも人生を肯定して、どうか唯今の狀態を切抜けて生活の意義を見つけようとしてゐる。蓋し此の考方は、此の世を否定し、どす黒い厭世觀に落込みたくはなく、絶望的な決定觀に押附けられるのに満足しないところから起るので、そんな時に開かれる一方の血路は、唯どんな方法かによつて人生を肯定する行き方だけである。人生を肯定するといつても、昔からの樂天觀に通有の空想的な夢幻的な回避的な肯定なら、何等の珍しいことは無いのであるが、一旦否定しなければならぬやうな世相に面接して、その暴露された醜さに戰慄した後、それでもこれをどうにかしようとして立つて來る肯定觀なら、本當に世路の辛酸を嘗めたものだけが持ち得る心境であつて、可なり複雑微妙な味に

到達してゐるのである。此の種の肯定觀の重みは、一旦否定觀を通過して來てゐるところに存する。とにもかくにも現實暴露の泥海から這上つて來た史的地位に立つもので、將來の發展を期待することの出来るものであつた。

これらの文學と比べると、一見甚だしく性質がちがつてゐるやうに見えて、實はその根柢に自然主義的文學と反對の人生觀を抱く點で相通する一種の文學があつた。それは夏目漱石及びその一派の文學である。

漱石は本來子規派の俳人であつたが、明治三十八年始めて散文の文學作家として現れた。現れるとすぐに「吾輩は猫である」と題する小説ともつかず隨筆ともつかぬ長篇を出して、文壇に重きをなした。爾來「坊ちゃん」や「草枕」等の短篇を経て、四十二年「そ

夏目漱石

名は金之助

英文學者

小説家

江戸生

大正五年歿

年五十

子規派

俳人正岡子規の

一派

れから等の長篇に移り、大正五年「明暗」を未完成のまま、て死ぬるに至るまで、長短の小説隨筆を出して大きな足跡を斯道に遺したのである。漱石の作に見える人生は、やはり自然主義的文學に現れたやうな苦悶の人生である。併しながら、その生き方は、そのいやな世の中にこびり着いて苦悶を續けるのではない。一度は此の境界を脱却してこれを客觀し得る心境を作り、更に此の世の中に歸り住んで、その超越の態度で人生を味はふのである。だから人生に對するに愛憎の差別を現さない。悠々とした餘裕があつて、何物にも拘泥しない廣さが感ぜられる。當時自然主義的文學の全盛時であつたから、此の餘裕のある態度がひどく異彩を放つて文壇を驚かしたのであつた。世間では此の態度を稱して俳諧的といつた。それは當つてゐ

る。人間の生死問題や自己の煩悶苦患をも、月花と同じに眺め得る點は俳諧的である。例へば重病に苦しむ、困憊の極に達する、その心持を文學に作る、その瞬間に文學的解脱の境に入るのである。又例へば、世の中は不合理に出来てゐて、持つて生れた正義感を満足せしめない。利欲の肉塊、名聞の臭骸、何れを見てもいやになる。これを舞臺上の喜劇を見る氣持で眺める。その刹那、そのいやな味から解放せられるのである。此の觀方は即ち俳諧に立脚したもので、江戸時代のものに比べると甚だしく嚴肅味を加へてはゐるが、やはり芭蕉の建立した世界を近代的にしたものといへる。

世間では又これを回避的だといつたが、それは當らない。眞正面から人生にぶつつかつて其の苦悶を経験するやうなことは、

既に自然主義的文學の方で十分爲し盡してゐる。今更其中へ飛込む要もなく、さればと言つて回避することもいらぬ。恐れず憎まず一段の高所から之を包容愛撫しようと言ふのである。人生の實相は醜であるが、之を醜として暴露することはもう濟んでゐる。これを平かに受取つて、その總べてを包容し、十分の餘裕を以て此の生を味ははうとするのである。だから回避的でなくて、むしろ低回的といふ方が當る。

漱石が「それから」を出し、「門」を出した時、自然主義風に變つたと言つた批評家があつたけれども、それは此の肯定的態度を見逃した爲の誤である。東洋風の、特に日本の對人生の態度であつて、新理想主義とか、新浪漫主義とか、人道主義とか、すべて西洋文學に見られるイズムの名稱をこれに當てはめるのは無理であ

るが、絶望せず、やけにならず、靜かに生の味に徹しようとするところは、正に肯定觀の文學である。而して肯定觀の文學としては、大正の初頭までに出たものの中で最も特色のある、又最も見ごたへのあるものであつた。それは現實のどん底を見極めて來てから、さて之を振返つて眺める境地に立つてゐるから、即ち自然主義的の難所を經過してしまつてゐるのである。この文學は、明治の終に芽を出したものであるが、大正に入つて段々生長して來て、自然主義的の文學が行詰つた頃から、これに代るやうな勢になり、或批評家や作家が自然主義的の立場から非難し擯斥したに拘らず、青年讀者の同情を集めて、漸次文壇の大樹と繁茂したのである。(明治大正の國文學)

七草 枕

夏目漱石

山路を登りながら、かう考へた。
智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、兎角に人の世は住みにくい。
住みにくさが高じると、易い處へ引越したくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出来る。
人の世を作つたものは神でもなければ、鬼でもない。矢張向三軒兩隣にちら／＼する唯の人である。唯の人が作つた人の世が、住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば、人てなしの國へ行くばかりだ。人てなしの國は、人の世よりも猶住みにくからう。
越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處を、どれほ

どか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来て、こゝに畫家といふ天命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豊かにする故に尊い。

カメラ
暗箱

住みにくき世から、住みにくき煩を引抜いて、有難い世界をまのあたり寫すのが詩である、畫である。或は音楽と彫刻とである。こまかにいへば、寫さないでもよい、只まのあたり見れば、そこに、詩も生き、歌も涌く。着想を紙に落さずとも、瑤鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自ら心に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗を清くうらゝかに收め得れば足る。この故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、

かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱する點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩する點に於て、千金の子よりも、萬乗の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十年にして、明暗は表裏の如く、月のある所にはきつと影がさすと悟つた。三十の今日は、かう思うて居る。喜の深きとき、憂愈深く、樂みの大きな程、苦みも大きい。これを切放さうとすると、身が持てぬ。片づけようとすれば、世が立たぬ。金は大事だ。大事なものが増えれば、寝る間も心配だらう。閣僚の肩は數百萬人の足を支へてゐる。背中には重い天下がおぶさつてゐる。旨い物も食はねば惜しい。少し食へば飽きたらぬ。存分食へ

ば後が不愉快だ。

余の考がこゝまで漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏損つた。平衡を保つ爲に、すはやと前に出した左足が、仕損じの埋合せをするに、共に、余の腰は工合よく方三尺程な岩の上におりた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍りだしただけで、幸に何の事もなかつた。

幽居人不_レ到_ラ。獨坐_ユ覺_ニ衣_ヲ寬_リ偶解_ス春風_ノ意_ヲ來_リ吟_ズ竹與_レ蘭。閑居偶成漱石

夏目漱石筆蹟

筆蹟

幽居人不_レ到_ラ。獨坐_ユ覺_ニ衣_ヲ寬_リ偶解_ス春風_ノ意_ヲ來_リ吟_ズ竹與_レ蘭。閑居偶成漱石

峯が聳えてゐる。杉か檜か分らないが、根元から頂まで、悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤く、だんだんに棚引いて、つゞき目が確と見えぬ位、靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めてゐる。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへはつきりしてゐる。行く手は二町程で切れてゐるが、高い處から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。土をならすだけなら左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平かにしても石は平かにならぬ。石は切碎いても岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲に道を讓る景色はない。向ふで聞かぬ上は、乗越すか、廻る

かしなければならぬ。巖のない處でさへ、歩きよくはない。左右が高く、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、其の頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くといはんよ、川底を涉るといふ方が適當だ。固より急ぐ旅ではないから、ぶらくと七曲へかゝる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてゐるのか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて、おたゝまれない様な氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬間の餘裕もない。長閑な春の日を鳴盡し、鳴明し、又鳴暮さなければ、氣が濟まぬと見える。其の上、何處迄も登つて行く、何時迄も登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登

り詰めた擧句は、流れて雲に入つて、漂うてゐるうちに、形は消えてなくなつて、只聲だけが空の裡に残るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆様に落ちる所を、際どく右へ切れて横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛揚つて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と揚る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に落ちる時にも、揚る時にも、また十文字に擦違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を取ることが忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只菜の花を遠く望んだ時に、眼が覺める。雲雀の聲を聞いたとき、魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのでは

Shelley
(1792—1822)
英國の詩人
シェレ

ない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレの雲雀の詩を思ひ出して、口の中で覺えた所だけ誦誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。其の二三句のなかに、こんながある。

前を見ては、後を見ては、物欲しとあこがるゝかな、われ。

腹からの笑といへど、苦みのそこにあるべし。

美しき極みの歌に、悲しさの極みの思、籠ることを知れ。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行かまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。

詩人だから萬斛で、素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲みも多からう。それならば、詩人になるのも考へものだ。

暫くは路が平らで、右は雜木山、左は菜の花の見續けである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸の様な葉が遠慮なく四方へ伸して、眞中に黄色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと振りむいて見ると、黄色な珠は依然として鋸の中に鎮座してゐる。暢氣なものだ。又考を續ける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦みもない。菜の花を見ても、只嬉しくて胸が躍る

ばかりだ。蒲公英も其の通り、櫻も——櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ来て、自然の景物に接すれば、見るもの、聞くもの面白い。面白いだけで、別段の苦みも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。しかし、苦みのないのは、何故だらう。只此の景色を一幅の畫として覽、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。只此の景色が——腹の足しにもならぬ、月給の補にもならぬ此の景色が、景色としてのみ余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力は、此に於て尊い。吾人の性情を瞬間に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたり、は、人の世につきものだ。余も三十年の間、それを仕通して飽きくした。飽きくした上に、芝居や小説で同じ刺戟を繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少なからう。何處までも世間を出る事が出来ぬのが、彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも、此の境を解脱することを知らぬ。何處までも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を駈けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。

人、繪の具箱と三脚几を擔いで、春の山路をのそくく歩くのも全くこれが爲である。淵明・王維の詩境を直接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの……願。一つの……醉興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情は、さう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて、年が年中南山を見詰めてゐたのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳もつらずに寝た男でもなからう。矢張餘つた菊は花屋へ賣つて、生えた筍は八百屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かういふ余も其の通り、いくら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山の中へ野宿する程、非人情が募つては居らぬ。

こんな處でも人間に逢ふ。ちんくく端折りの頬被や、赤い腰卷

の姉さんや、時には人間より顔の長い馬にまで逢ふ。百萬本の檜に取圍まれて、海面を抜く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭みは中々取れない。それどころか、山を越えて落ちつく先の今宵の宿は那古井の温泉場だ。(草枕)

八 新島守

いつの年よりも五月雨霽間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武者どももあやしく艱めり。かゝれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。其の勢六萬餘騎とかや。宇治瀬田へ分ち遣はす。世の中ひびきの、しるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落下り、す

君
後鳥羽院

六月二十日
仲恭天皇の承久
三年(八八二)

本院
後鳥羽院
ものにもがなや
とりかへすもの
にもがなや世の
中をありしなが
らのわが身と思
はむ(源氏物語、
帯木)

べて安げなく騒ぎみちたり。いかゞあらんと、君も御心亂れておぼし惑ふ。豫ては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわたしく、色を失ひたる様ども頼しげなし。六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて、遂に味方の軍敗れぬ。荒磯に、高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍計らひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院宮々處々におぼし惑ふこと更なり。本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせたまふ。今日を限の御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」とおぼさるゝもかひなし。その日、やが

信實

右京權大夫藤原
信實
文永二年(一一五三)
卒
年八十九
七條院
血侍藤原殖子
後鳥羽天皇の御
生母
安貞二年(一一八八)
薨
年七十二

新院

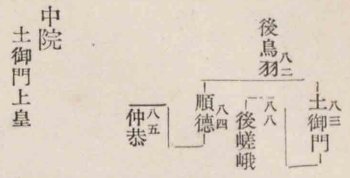
順德上皇
帝
仲恭天皇



後鳥羽天皇御像
藤原信實筆

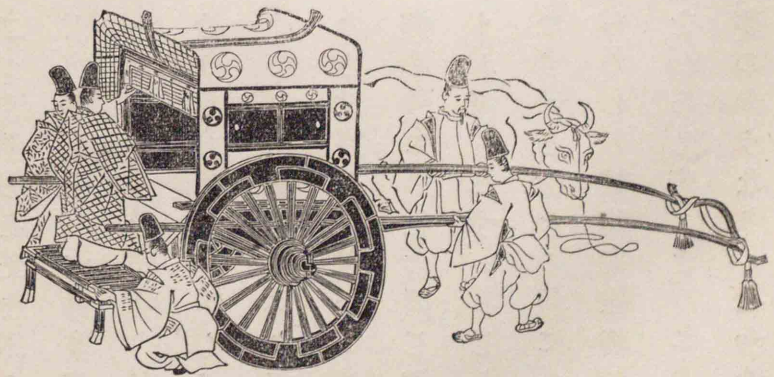
て御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせたまふらん。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。かくて同じ十三日に御船に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじう、いかなりける世々の報にかとうらめし。新院も佐渡の國に

遷らせ給ふ。まことや七月九日、帝をおろし奉りき。この卯月かとお、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日に

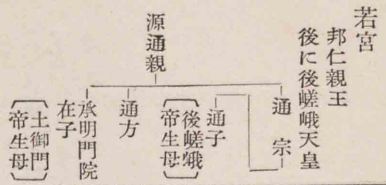


幡多
 土佐國の西端に
 ある大郡

ておりたまへるためしも、これや始なるらん。さて上達部殿上人それより下はた残りなく、この事に觸れにし類は、重く、軽く、罪に當る様いみじげなり。中院は初めよりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父の院遙かに遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらん事いと恐あり。とおぼされ、御心もて、その年閏十月十日、土佐の國の幡多といふ處に渡らせ給ひぬ。去年の二月ばかりにや、



綱 輿 車 代 考 圖 車



六つにて
 後鳥羽院

若宮いできたまへり。承明門院の御兄人に、通宗の宰相中將とて、若くて失せたまひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉りたまひて、近く侍ひける北面の下藤一人、召次などばかりぞ御供仕うまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせたまふ。道すがら雪かきくらし、風吹荒れ、吹雪して、來しかた往く先も見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ

ことわり知らぬわがなみだかな

「せめて近き程に。」と東より奏したりければ、後には阿波の國に遷らせたまひにき。

六つにて位に即きたまひて、十三年おはしましき。下りたまひ

津の國のこや

津の國のこやと
も人のいふべき
にひまこそなけ
れ葦の八重葦
(後拾遺集、和泉
式部)

て後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じことなりしかば、すべて三十六年が程この國のあるじとして萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を従へたまへりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有様にて、遠きをあはれみ、近きを撫でたまふ御惠、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松もやうく、枝をつらねて千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を経ても空ゆく月日の限知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありく、てよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちりく、にさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからこととふものとは、浦に釣する海士小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷のしるべか

柴の庵

いづくにもすま
れずばたすま
であらむ柴のい
ほりのしばしな
る世に(新古今
集、西行)

水無瀬殿

攝津國三島郡水
無瀬に御造營遊
ばされた後鳥羽
院の御離宮
二千里の外
三五夜中新月色
二千里外故人心
(唐の白樂天)

とばかりながめすごさせたまふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて何時を果と廻り逢ふべき限だになく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡し給ふべき御有様ども、くちをしともおろかなり。
このおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少し引入りて、山陰にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。誠に、柴の庵のたゞしばし。とかりそめに見えたる御宿りなれど、さるかたになまめかしく、故づきてしなさせたまへり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるく、と見やらる、海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。

潮風のいとこちたく吹來るを聞しめして、

われこそは新島守よおきの海の

あらし波風こゝろして吹け (増鏡)

かぐや姫

竹取の翁が竹の中から得てそだてあげた姫

九 かぐや姫

春の初めよりかぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。或人の月の顔見るは忌むことと制しけれども、ともすれば人まには、月を見てはいみじく泣き給ふ。ふづきの望の月に出でゐて、切に物思へるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、かぐや姫例も月をあはれがり給ひけれども、この比となりては、たゞ事にも侍らざめり。いみじく思し歎く事あるべし。よくよく見奉らせ給へ。といふ

竹取の翁

野山に入つて竹を取ることを業とした老人名は讚岐造磨

を聞きて、かぐや姫にいふやう、なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ、うましき世に。といふ。かぐや姫、月を見れば世の中心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき。といふ。かぐや姫のある處に到りて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむ事何事ぞ。といへば、思ふ事もなし、物なむ心細く覺ゆる。といへば、翁、月を見給ひそ。これを見給へば、物おぼすけしきはあるぞ。といへば、いかでか月を見ではあらむ。とて、なほ月出づれば出でゐつゝ、歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月の程になりぬれば、なほ時々は打歎き泣きなどす。これをつかふものども、なほ物おぼすことあるべし。とさゝやけど、親を始めて、何事も知らず。

八月望ばかりの月に出でて、かぐや姫といたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも何事ぞ。と問ひさわぐ。かぐや姫泣くくいふ、さきくも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて打ちいで侍りぬるぞ。己が身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それをなむ昔の契ありけるによりてなむ、この世界にはまうで來たりける。今は歸るべきになりければ、この月の望に、かのもとの國より迎に人々まうで來むず。さらずまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。といひていみじく泣くを、翁、こはなでふことを宣ふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさはせしを、わが丈立並ぶまで養ひ奉り

たるわが子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや。といひて、われこそ死なぬ。とて泣きのゝしること、いと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、月の都の人にて父母あり。片時のまとて、かの國よりまうで來しかども、かくこの國には、數多の年を経ぬるになむありける。かの國の父母の事もおぼえず、こゝにはかく久しく遊び聞えてならひまつれば、いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど、己が心ならず罷りなむとする。といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人ども、年比ならひて、立別れなむ事を、心ばへなどあてやかに、美しかりつることを見ならひて、戀しからむことの堪へがたく、湯水も飲まれず、同じ心に悲しがりけり。

この事を帝聞召して、竹取が家に御使遣はさせたまふ。御使に

六衛
左右の近衛府・
衛門府・兵衛府

竹取出で會ひて泣くこと限なし。この事を歎くに、髪も白く、腰も屈まり、目も爛れにけり。翁今年は五十ばかりなりけれども、物思には片時になむ老になりけると見ゆ。御使仰言とて翁に曰く、「いと心苦しく物思ふなるは、實にか」と仰せ給ふ。竹取泣く泣く申す、「この望になむ、月の都よりかぐや姫の迎にまうて來なる。たふとく問はせ給ふ。この望には人々賜はりて、月の都の人まうて來ば、捕へさせむ」と申す。御使歸り参りて、翁の有様申して、奏しつることども申すを聞召して宣ふ、「一目見たまひし御心にだに忘れ給はぬに、且暮見馴れたるかぐや姫を遣りては、いかが思ふべき」とて、かの望の日司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人をつかはして、六衛のつかさ合せて二千人の人を竹取が家に遣はす。

姫
竹取の翁の妻
塗籠
土藏造の藏



かぐや姫の昇天

家に罷りて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合せて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓矢を帶して居り。母屋の内には、女どもを番にすゑて守らす。姫、塗籠の内にかぐや姫を抱へて居り。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁のいはく、「かばかり守る處に、天の人にも負けむや」といひて、屋の上に居る人々にいはく、「つゆも物が空に翔らば、ふと射殺し給へ。守る人々のいはく、「かばかりして守る處に、蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して、外にさら

さむと思ひ侍り。」といふ。翁これを聞きて、頼しがり居り。これを聞きて、かぐや姫は、さし籠めて守り戦ふべきしたぐみをしたりと、あの國の人をばえ戦はぬなり、弓矢して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば、皆あきなむとす。あひ戦はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ。」翁のいふやう、御迎に來む人をば、長き爪して眼をつかみつぶさむ。さが髪を取りてかなぐり落さむ。さが尻を搔きいでて、こゝらのおほやけ人に見せて、恥見せむ。」と腹立ち居り。かぐや姫はいはく、聲高になのたまひそ。屋の上に居る人どもの聞くに、いとまさなし。いますかりつる志どもを、思ひも知らて罷りなむずることの口惜しう侍りけり。長き契のなかりければ、程なく罷りぬべきなめりと思ふが悲しく侍るなり。親たち

のかへりみをいさゝかだに仕うまつらで、罷らむ道も安くもあるまじきに、月ごろも出でゐて、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許されぬによりてなむ、かく思ひ歎き侍る。御心をのみ惑はして去りなむことの悲しく堪へがたく侍るなり。かの都の人は、いと清らにて、老いもせずなむ、思ふこともなく侍るなり。さるところへまからむずるも、いみじくも侍らず、老い衰へたまへるさまを見奉らざらむこそ戀しからめ。」といひて泣く。翁胸痛きことなしたまひそ。うるはしき姿したる使にも障らじ。」とねたみ居り。

かゝる程に宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆる程なり。大空より人雲に乗りて、降

り來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども物に魔はるゝやうにて、相戦はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を取立てむとすれども、手に力もなくなりて、萎え屈まりたる中に、心さかしきもの、念じて射むとすれども、外さまへ往きければ、何れも戦はで、心地ただしれにしれてまもりあへり。

立てる人どもは、装束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、家に造磨まうて來。といふに、猛く思ひつる造磨も、物に酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。いはく、汝をさなき人、聊かなる功德を、翁つくりけるによりて、汝が助にとて片時のほどとて降ししを、そこの年比、そこの金の賜ひて、身を換へたるが如くなりけり。

かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許に、しばしおはしつるなり。罪の限はてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く、能はぬことなり。はや返し奉れ。といふ。翁答へて申す、かぐや姫を養ひ奉ること二十年餘になりぬ。片時と宣ふに怪しくなり侍りぬ。又他處に、かぐや姫と申す人ぞおはしますらむ。といふ。こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ。と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車をよせて、いざかぐや姫、穢き處に、いかで久しくおはせむ。といふ。立てこめたる所の戸、即ちたゞあきにあきぬ。格子どもも、人はなくしてあきぬ。姫抱きてゐたるかぐや姫、外に出でぬ。え留むまじければ、たゞさし仰ぎて泣居り。

竹取心惑ひて泣きふせる處に寄りて、かぐや姫いふ、こゝにも心

にもあらで、かく罷るに、昇らむをだに見送り給へ。」といへども、何しに悲しきに見送り奉らむ。われをいかにせよとて棄てては昇り給ふぞ。具して率ておはせね。」と泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。「文を書きて罷らむ。戀しからむをりく、取出でて見給へ。」とて、打泣きて書くことは、この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬほどまで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬること、かへすく本意なくこそおほえ侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりも墜ちぬべき心地す。」と書置く。

天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の薬入れり。一人の天人いふ、壺なる御薬奉れ、穢き處のものきこしめしたれば、御心地悪しからむものぞ。」とて、持てよりたれ

ば、聊か嘗め給ひて、少しかたみとて、脱ぎおく衣に包まむとすれば、或天人包ませず、御衣を取出して着せむとす。そのときにかぐや姫「しばし待て。」といひて「衣着つる人は心ことになるなり。」といふ。物一言いひ置くべき事ありけり。」といひて文書く。天人遅しと、心もとながり給ふ。かぐや姫、物知らぬ事なのたまひそ。とて、いみじくしづかにおほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。

「かく數多の人を賜ひて留めさせ給へど、許さぬ迎まうて來て、取率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと、宮仕つかうまつらずなりぬるも、かく煩はしき身にて侍れば、心得ず思召しつらめども、心強くうけたまはらずなりにし事なめげなるものに思召しとどめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる。」とて、

頭中將
近衛中將兼藏人
頭

今はとて天の羽衣着るをりぞ

君をあはれとおもひいでぬる

とて、壺の薬添へて、頭中將を呼寄せて奉らす。中將に天人取りて傳ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣打着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しとおぼしつる事も失せぬ。この衣着つる人は物思もなくなりにければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。その後翁、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書置きし文を読み、聞かせけれど、何せむにか、命も惜しからむ。誰が爲にか、何事もやうもなし。とて薬もくはず、やがて起きもあがらで病み臥せり。

中將人々を引具してかへり参りて、かぐや姫をえ戦ひ留めずなりぬることをこまゝと奏す。薬の壺に御文添へてまゐらす。

ひろげて御覽じて、いといたくあはれがらせ給ひて、物もきこしめさず、御遊などもなかりけり。大臣・上達部を召して、いづれの山か天に近き。と問はせたまふに、ある人奏す、駿河國にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る。と奏す。これを聞かせたまひて、

あふことも涙にうかぶわが身には

死なぬくすりも何にかはせむ

かの奉る不死の薬の壺に、御文具して、御使にたまはす。勅使には月岩笠といふ人を召して、駿河國にあなる山の頂にもて行くべきよし仰せ給ふ。峯にてすべきやう教へさせ給ふ。御文・不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃すべきよし仰せ給ふ。そのよし承りて、兵士ども數多具して山へ登りけるよりなむ、その山

をふしの山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へたちのぼるとぞいひ傳へたる。(竹取物語)

土井晚翠

名は林吉

英文學者

詩人

第二高等學校教

授

明治四年仙臺生

四大

佛教でいふ萬物
生成の根元たる
地・水・火・風
の稱

一〇 八朶の芙蓉

土井晚翠

はやも下界の空しらむ時風雲のいさよひに、
天地創生の朝ぼらけ昔のあとぞしのぼるゝ。
暗は逃れて旭陽の光はじめて照りしとき、
四大おのゝ其の則に就きて渾沌の去りし時、
われ九天の水引きて、東海萬石の波たゝへ、
玉闕の柱つんざきて、芙蓉千仞の基おきぬ。

天地の間、靈嶽の氣に清風の吹きてより、

黃鶴露を吸去りて、秋白帝の樓に飛び、

青鸞花を啣み來て、春瑤臺の仙を乗せ、

彩雲永く一帯の天衢に通ふ路引きて、

神韻妙詩おのづから嶺に收る數千秋。

此の邦いまだ此の山を歌はん聲はあらずとも、

玉露明星もろともに、永く宇宙の靈に聽き、

花萼川流とこしへに、中に不朽のしらべあり。

嗚呼東海の君子國、史は百王の跡遠く、

二千餘年の春ふけて、斯文の華の遅くとも、

香はかんばしき千載の未來の望無からんや。

群巒遠く下に見る芙蓉の姿、雪の膚、

清きは民の心なれ、高きは民の思なれ。

積水淵を湛へては、うち蛟龍の涌く如く、

積塵山を築きては、かみ風雲を捲く如く、

長きに忍ぶ此の邦の理想は實と現れて、

天地無窮の美の靈に民の融化し入らん時、

扶桑の俗を改めて、八采の芙蓉たぐひなき

影東海の波のへに、萬邦の仰ぎ觀なんとき、

其の時今にほの見せて、靈山の空明けわたる。

見よ萬頃の海鳴りて、波は黄金の花開き、

紅雲錦の粧をこらす朱陽の曙の色。

楯匂

鎧のをどしの上
方をはじ色にし
次第にぼかして
下を白くしたも

小鳥

平家重代の寶刀

切斑

中が白く上下が

滋籐の弓

幅一寸(三程)位

弓

五分(一程半)お

黄桃花毛

黄を帯びた紅色

貝鞍

青貝を鑲めた鞍

樊噲

漢の高祖の臣

張良

漢の高祖の臣

智謀の士

張良

漢の高祖の臣

希望の光うら若く、峯千秋の雪に照り、

愛と匂と聲樂と、皆一つなる天上の

無限の譽ほの見する富士の高嶺の朝ぼらけ。(晚翠詩集)

一一 待賢門の戦

左衛門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に楯匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締め、小鳥といふ太刀を帶き、切斑の矢負ひ、滋籐の弓持つて、黄桃花毛なる馬に、柳櫻摺つたる貝鞍置かせて乗り給へり。重盛のたまひけるは、年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。誰か爰に樊噲、張良が勇をなさざらん。とて、三千餘騎を三手に分つて、近衛

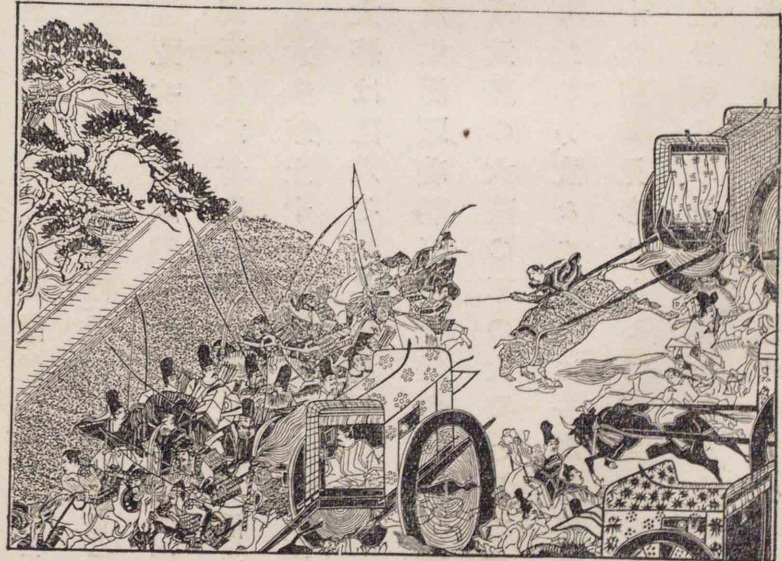
見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大将として恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信賴といふ不覺人は臆したりな。とて、日華門を打出でて、郁芳門へ向はれければ、信賴も鼻血押拭ひ、とかくして馬に搔乗せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用にあふべしとも見えざりけり。

左衛門佐重盛五百餘騎をば大宮表に残し置き、五百餘騎にて押寄せて呼ばはり給ひけるは、この門の大將軍は信賴卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳清盛が嫡子左衛門佐重盛、生年二十三。と名のり懸けければ、信賴返事にも及ばず、「それ防げ侍ども」とて引退く。大将の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし、我先にと逃げければ、重盛愈勇みて、大庭の椋の木の下まで攻附けたり。義朝之を見て、惡源太はなきか。信賴といふ大臆

大藏
埼玉縣武藏國比
企郡菅谷村の大
字

病人が待賢門をはや破られつるぞや。あの敵追出せ。と宣ひければ、承り候。とて駈けられたり。續く兵には鎌田兵衛、後藤兵衛、佐々木源三、波多野次部三浦荒次郎、須藤刑部、長井齋藤別當、岡部六彌、太猪俣小平六、熊谷次郎平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關次郎、片桐小八郎大夫以上十七騎、轡を雙べて馳向ふ。大音聲を揚げて、この手の大将は誰人ぞ。名のれ、聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が嫡子鎌倉惡源太義平と申す者なり。生年十五歳、武藏の大藏の軍の大将として叔父帶刀先生義賢を伐ちしより、此の方、度々の合戦に一度も不覺の名をとらず。年つもつて十九歳。見參せん。とて、五百騎の眞中に割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、縦様横様十文字に敵をさつと蹴散らして、端武者どもに目な懸けそ、大

將軍を組んで撃て。櫓の
匂の鎧に蝶の裾金物打つ
て黄桃花毛の馬に乗つた
るこそ重盛よ。押雙べて
組んで落ち手捕りにせよ。
と下知すれば、大將を組ま
せじと防ぐ平家の侍ども、
與三左衛門・新藤左衛門を
始めとして百騎ばかりが、
中にぞ隔りける。惡源太
を始めとして十七騎の兵
ども、大將軍に目を懸けて



平治物語繪卷の第一部
藤原家隆筆

筑後守
平家貞
平將軍
平貞盛

大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻
して、組まんくとぞ揉うだりける。十七騎に駈けたてられて、
五百餘騎叶はじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。
大將左衛門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つ
と参りて、曩祖平將軍の再び生れ替り給へる君かな。と向ふさま
に譽め奉れば、今一度駈けて家貞に見せんとや思はれけん、前の
五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の
木まで攻寄せたり。また惡源太駈向ひ、見まはしていひけるは、
「只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。
以前こそ洩らすとも、今度に於ては餘すまじ。押雙べて組んで
捕れ、兵ども。」と下知すれば、勇みたる十七騎われさきにと進みけ
れば、今度は難波次郎・同じき三郎・瀬尾太郎・伊藤武者を始めとし

て、百餘騎が中に隔てたるに事ともせず、惡源太、弓をば小脇に搔
いはさみ、鎧踏張り突立ちあがり、左右の手を擧げ、幸に義平源氏
の嫡々なり、御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はん、寄れや、
組まん。といふまゝに、先のごとく大庭の棕の木の下を追廻して
五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思は
れけん、又大宮表へ引いて出づ。

惡源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけ
るに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げば、こそ敵
度々駈入るらめ。あれ速かに追出せ。といひ遣はされければ、俊
綱馳せてこの由をいふに、承り候。進めや、者ども。とて色も替ら
ぬ十七騎、大宮表に駈出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つ
て入る。引立てたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下り

に二條を東へ引きければ、我が子ながらも義平はよく駈けたる
かな。あ、駈けたり。とぞ譽められける。

堀川
大宮の東の通
名の如く堀があ
る

唐皮
平家重代の鎧の
一 虎の皮をどし
たので唐皮とい
ふ名がついた

大將重盛、與三左衛門景安、新藤左衛門家泰、主従三騎かけ離れ、二
條を東へ引かれければ、惡源太、鎌田にきつと目合せて、爰に落つ
るは大將とこそ見れ。返せや。とて追つかけたり。既に堀川に
て追つつめたるが、弓手の方に材木多く充ち満ちたるに、惡源太
の乗り給へる馬かたなづけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手の
方へけし飛んで、小膝を折つてどうと伏す。鎌田兵衛のばさじ
と、十三束取つて交ひ、よつ引いてひようと射る。重盛の射向の
袖にはたと中りて飛返る。やがて二の矢を射たりければ、押附
にちようと中りて、籠かづき碎けて跳り返れり。惡源太、これは
聞ゆる唐皮といふ鎧ごさんなれ。馬を射て、落ちん所を撃て。と

下知せられければ、又よつ引いて追ひざまに筈の隠るゝ程射込
みたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳ね落され、
兜も落ちて大童になり給ふ。鎌田堀川を馳せこえて、重盛に組
まんと落合ふ。重盛近づけては叶はじとや思はれけん、弓の弾
にて鎌田が兜の鉢をちようと突く。突かれてゆらふる間に、兜
を取つて打着つゝ、緒を強くこそ締められけれ。

與三左衛門馳せよつて中に隔り申しけるは、漢の紀信は高祖の
命に代りて滎陽の圍を出し、終に天下を保たせき。『主辱しめら
るゝ時は臣死す。』といふにあらずや。景安爰に在り、寄れや、組ま
ん。』といふまゝに、鎌田兵衛と引組んで取つて押へける處に、惡源
太馬引起し、これも堀川を馳せこえて、重盛に組まんと跳んで懸
りけるが、鎌田をや助くる、大將をや撃たん。』と思案しけれども、大

主辱しめらる
君憂^{ウレ}臣勞^{ラウ}
君辱^{ウレ}臣死^シ
(國語)

將にはまたも寄せ合ふべし。政家を撃たせては叶はじ。』と思ひ、
與三左衛門に落ちあうて、三刀刺して首を取る。重盛は頼み切
つたる景安撃たせて、命生きて何かせん。』とて既に惡源太と組ま
んとせられけるを、新藤左衛門馳來り、家泰が候はざらん處にて
こそ大將の御命をば捨てたまふべけれ。』とて、我が馬を引向け、中
に隔てて惡源太とむざと組む。政家は重盛に組まんとしける
が、主を撃たせては叶はじと思ひければ、新藤左衛門に落重なつ
て首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて六波羅までぞ落ち
られける。二人の侍なからましかば、たすかり難き命なり。

(平治物語)

一三 小松内府

赤地の錦の直垂
大將の着る鎧直垂
腹巻
略式の鎧
嚴島大明神
主神は市杵島姫命

平右馬助
平忠正
新院
崇徳上皇
一宮
崇徳天皇の第一皇子重仁親王
故刑部卿
平忠盛
故院
鳥羽法皇

太政入道はかやうに人々數多縛め置いて、尙心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に黒絲絨の腹巻の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて嚴島大明神より現に賜はられたりける銀の蛭巻したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしくぞ見えし。「貞能」と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋絨の鎧着て、御前に畏つてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、この事いかが思ふぞ。保元に平右馬助を始めとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一宮の御事は故刑部卿殿の養君にてましくしかば、旁見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて先をかけたたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月信賴

院
後白河上皇
内
二條天皇



平都京
重市高
重雄
盛寺護

義朝が謀叛の時、院内を取奉つて大内にたて籠り、天下くらやみとなりたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追落し、經宗惟方を召しおこし、めしに至るまで、君の御爲に既に命を失はんとする事度々に及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思召し捨てさせ給ふべき。それに、成親といふ無用の徒者、西光と申す下賤の不當人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆる

鳥羽の北殿
城南の離宮
今の京都市伏見
區下鳥羽にあつ
た

ぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、さらずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者どもが中より矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ、きせなが取出せ。とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳參つて、世ははやかう候。と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、嗚呼、はや成親卿の首の刎ねられたんな。と宣へば、その儀では候はねども、入道殿の御きせながを召され候上は、侍どもも皆打立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、さらずばこれへまれ御幸をなし參らせ

うとは候へども、内々は鎮西の方へ流し參らせんところを議せられ候ひつれ。と申しければ、大臣、何によりて只今さる御事のおはすべき。とは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物ぐるほしき事もやおはすらん。とて、急ぎ車を飛ばせて西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の中へさし入りて見給ふに、入道腹巻を着給ふ上、一門の卿相、雲客數十人、各色々の直垂に思ひくの鎧着て、中門の廊に二行に着せられたり。その外、諸國の受領、衛府諸司などは縁にゐこぼれ、庭にもひしと並みゐたり。旗竿ども引きそばめく、馬の腹帯をかため、兜の緒をしめ、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子直衣に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

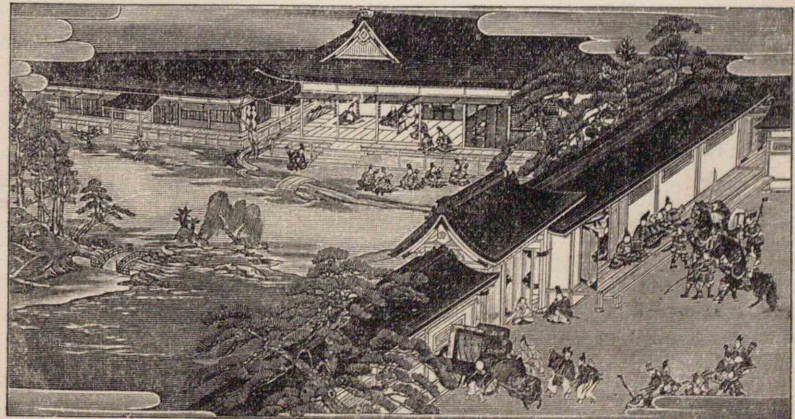
衛府
左右の兵衛府・
近衛府・衛門府
の總稱
又その官人

烏帽子直衣
直衣を着て冠を
用ひずに烏帽子
をつけた姿

へうす
表ずか
諷すか

五戒
殺生戒
偷盜戒
邪淫戒
妄語戒
飲酒戒
五常
仁義禮智信

入道ふしめになつて、あはれ例の内
府が世をへうずる様に振舞ふもの
かな、大きにいさめばや。」と思はれけ
れども、流石子ながらも、内には五戒
を保つて慈悲を先とし、外には五常
を亂らず禮儀を正しうし給ふ人な
れば、あの姿に腹巻を着てむかはん
こと、流石面はゆう、はづかしうや思
はれけん、障子を少し引立てて、腹巻
の上に素絹の衣をあわてぎに着給
ひたりけるが、胸板の金物の少し外
れて見えけるを隠さうと、頻に衣の



重盛の諫言
繪原文翠筆東京帝國博物館藏

胸を引違へくぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上につ
き給ふ。入道宣ひ出さるゝ事もなく、大臣も亦申し上げらるゝ
旨もなし。

やゝあつて入道宣ひけるは、成親卿が謀叛は事の數にも候はず、
一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めん程、法皇
をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、さらずばこれへまれ御幸を
なし參らせんと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、
はらくとぞ泣かれける。入道さて、いかにやいかに。」と呆れ給
へば、やゝあつて、大臣涙を抑へて、この仰承り候に、御運ははや末
になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ
立ち候なり。又御有様を見參らせ候に、更に現とも覺え候はず
流石我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、

國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこのかた、太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふこと禮儀をそむくにあらずや。就中出家の御身なるに、法衣を脱捨てて忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帶しましきこと、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にもそむき候ひなんぞ。かたゞ、恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにも候はず。

普天の下、
溥天之下、
非王土、
非王土、
濱、莫、
濱、莫、
穎川に云々
許由
首陽山に云々
伯夷叔齊

まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、是なり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下、王土に非ずといふことなく、率土の濱、王臣に非ずといふことなし。さればかの穎川に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命の背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いかにいはんや、先祖にも未だ聞かざつ

蓮府
南齊の宰相王儉
が相府に蓮を栽
ゑた故事から出
た語
槐門
面三槐三公位
(周禮)

し太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て蓮府、槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園盡く一家の進止たり。是、希代の朝恩に非ずや。今此等の莫大の御恩を思召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法皇を傾け参らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんぞ。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて四海の逆浪を鎮めしことは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは旁若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによりて、事既に露れ候ひぬ。その上、仰せ合はせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君如何なる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の恐か候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、

敍爵
從五位下に敍せられること

千顆萬顆の玉
瑩^{ニク}瑩^{ニク}日^{ニク}瑩^{ニク}風^{ニク}高低
千顆萬顆之玉。
染^メ枝^メ染^メ浪^メ表^メ裏
一入再入之紅。
(和漢朗詠集、菅原文時)

君の御爲には愈、奉公の忠勤を盡し、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思召し直すこと、などか候はざるべき。是は尤も君の御理にて候へば、叶はざらんまでも、院中を守護し参らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。その恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を按ずるに、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に参り籠り候べし。その儀にて候はば、重盛が身に代り命に代らんと契りたる侍ども少々候らん。是等を召具して院の御所法住寺殿を守護し参らせ候はば、流石以ての外の御大事でこそ候はんずらめ。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、

迷盧

須彌山
蘇迷盧山
その山の高きは八萬四千由旬であるといふ

富貴の家には
常觀^ニ富貴^ニ之家^ニ、
祿位^ニ重疊^ニ、猶^ニ再^ニ
實^ニ之^ニ木^ニ、其^ニ根^ニ必^ニ
傷^ニ。(後漢書)

迷盧八萬の頂よりも猶高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には已に不忠の逆臣となりぬべし。進退維れ谷れり、是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、唯重盛が首を召され候へ。その故は、院参の御供をも仕るべからず、又院中をも守護し参らすべからず。(中略) 富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。「富貴の家には祿位重疊せり、再び實なる木はその根必ず傷む」と見えて候。心細うこそ候へ。いつまでか命生きて、亂れん世をも見候べき。たゞ末代に生を受けてかゝる憂き目にあひ候重盛が果報の程こそつたなう候へ。只今も侍一人に仰せ付けられ、御坪の内へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんことは、いと易い御事でこそ

寺子屋

竹田出雲・三好
松洛・並木千柳
合作「菅原傳授
手習鑑」の一節
竹田出雲

戯曲作者

大阪の人

寶曆六年(西六

年六十六

歿

菅秀才

菅丞相の子

當年八歳

六字

南無阿彌陀佛

梅は飛び

梅王が筑紫へ下

つたとき菅丞相

が詠まれた歌だ

といふ

夫婦

武部源藏とその

妻戸浪

候はんずらめ。是を各聞き給へ。とて、直衣の袖も絞るばかりにかきくどき、さめくくと泣き給へば、その座に並み居給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。(平家物語)

一三 寺子屋

竹田出雲

小太郎が母涙ながら、若君菅秀才のお身代り、お役に立てて下さつたか、まだか。様子が聞きたい。といふにびつくり、してくそれは得心か。「得心なれやこそ此の經帷子、六字の幡。」んう、して其の許は何人の御内證。と尋ぬる内に、門口より、梅は飛び櫻は枯る、世の中に、何とて松のつれなかるらむ。女房悦べ。悴はお役に立つたぞ。と聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す。「やあ未練者め。」と叱りつけ、ずつと通るは松王丸。見るに夫婦は

夫婦か

松王と小太郎の
母とは夫婦であ
つたか

兄弟三人

松王

梅王

櫻丸

丞相様

右大臣菅原道眞
公

著

易占の具
帯木の莖又は竹
を用ひて造る
筮竹

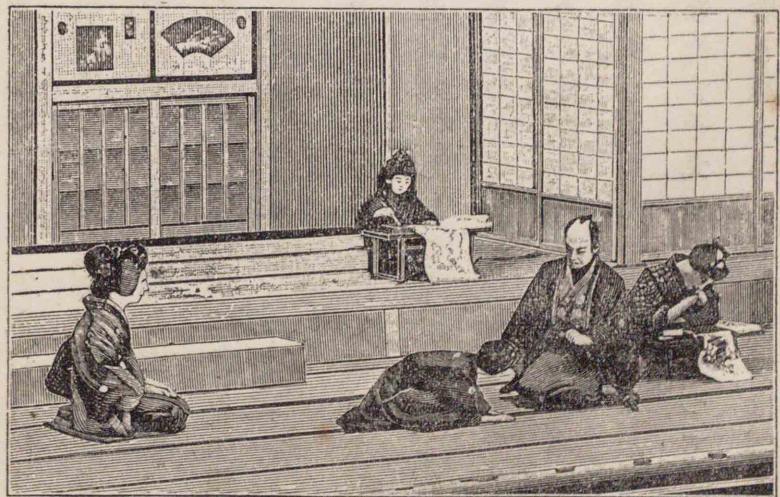
二度びつくり。夢か現か夫婦かと呆れて詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し、一禮は先づあとの事。これまで敵と思ひし松王、打つて替つた所存はいかに。不審しさよ。と尋ねれば、お、御不審尤も。存じの通、我々兄弟三人は、めい／＼に別れて奉公。情なや此の松王は時平公に随ひ、親兄弟とも肉縁切り、御恩請けた丞相様へ敵對。主命とはいひながら、皆これ此の身の因果、何卒主従の縁切らんと、作病構へ、暇の願。菅秀才の首見たらば、暇やらんと、今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい。なれども、身代りに立つべき一子なくば、いかがせん。爰ぞ御恩を報ずる時と、女房千代と言合せ、二人の中の悴をば、先へ廻して此の身代り。机の敷を改めしも、我が子は來たかと心の著。菅丞相には我が性根を見込み給ひ、何とて松はつれなからうぞとの御歌を、

小太郎
松王の長子

松はつれない、つれないと、世上の口にかゝる悔しさ。推量あれ、源藏殿。悴がなくばいつまでも、人てなしといはれんに、持つべき者は子なるぞや。といふに、女房猶せき上げ、草葉の蔭で小太郎が聞いて嬉しう思ひましょ。持つべき者は子なるとは、あの子が爲によい手向。思へば最前別れた時、いつにない跡追うたを、叱つた時の其の悲しさ。冥途の旅の寺入と、早蟲が知らせたか。隣村へ行くというて、途までいんで見たれども、子を殺さしにおこして置いて、どうまあ内へいなるゝものぞ。死顔なりとも、今一度見たさに、未練と笑うて下さんな。包みし祝儀は、あの子が香奠。四十九日の蒸物まで、持つて寺入さすといふ悲しい事が世に有らうか。育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子はみめよしと、美しう生れたが、かはいや其の身の不仕

合。何の因果に疱瘡まで、しまうた事ぢや。とせき上げて、かつばと伏して泣きければ、俱に悲しむ戸浪は立寄り、最前にな、連合の身代りと思ひついた傍へいて、「お師匠様、今から頼み上げます。」というた時の事思ひ出せば、他人のわしさへ骨身が碎ける。親御の身ではお道理。と涙添ふれば、いやこれ御内證。これや女房も何でほえる。覺悟した御身代り、内で存分ほえたでないか。御夫婦の手前もある。いや何、源藏殿。申し付けてはおこしたれども、定めて最期の節、未練な死を致したでござらう。「いや若君菅秀才の御身代りと言聞かしたれば、潔う首さしのべ。」あの逃隠れも致さずにな。「につこりと笑うて。「んう、出かし居りました。利口な奴、立派な奴、健氣なやつや九つて、親に代つて恩送り、お役に立つたは孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御

恩も送らず先立ちし、さぞや草葉の蔭よりも羨ましからう、けなりからう、悴が事を思ふにつけ、思ひ出さるゝ、出さるゝ。」と流石同腹同姓を忘れかねたる悲歎の涙。「のう、その叔父御に、小太郎が逢ひますはいの。」と取付いて、わつとばかりに泣沈む。歎も漏れて菅秀才、一間の内より立出て給ひ、我に代ると知るならば、この悲みはさすまいにかはいの者や。」と御袖を絞り給



(劇) 屋 子 寺

河内の國

河内國土師村
菅丞相の伯母覺
壽の居村
菅丞相の姫君刈
屋姫もそこに隠
れてゐた

六道

地獄道
餓鬼道
畜生道
修羅道
人間道
天上道

能化

師となつて他を
教化するもの
「所化」の對
「六道能化」の菩
薩とは地藏菩薩
をさす

へば、夫婦ははつと共にひたする有難涙。「序ながら若君様へ御土産。」と松王突つ立ち、申し付けた用意の乗物、早く〜。」と呼ばはるにぞ、はつと答へて家來共御目通に昇据うる。「早御出。」と戸を開けば、菅丞相の御臺所、のう母様か、我が子か。」と御親子不思議の御對面。源藏夫婦横手を打ち、方々と御行方尋ねしに、何處にか御座なされし。「されば〜、北嵯峨の御隱家、時平の家來が聞出し、召捕に向ふと聞き、某山伏の姿となり、危い處を奪ひ取つたり。急ぎ河内の國へ御供なされ、姫君にも御對面。これや〜、女房小太郎が死骸、あの乗物へ移し入れ、野邊の送營まん。」「あい。」と返事、其の中に、戸浪が心得、抱いてくる死骸を網代の乗物へ乗せて、夫婦が上着を取れば、あはれや内より覺悟の用意、下に白無垢麻社杯。心を察して源藏夫婦、野邊の送に親の身で、子を送る法

賽の河原
冥途の三途の川のほとり
小兒が小石で塔を積むと大鬼が来ては崩してしまふそれを地藏菩薩が現れて救ふといふ

劍
冥途にあるといふ劍の山
死出の山
冥途の閻魔王國の境にあるといふ山

吉村冬彦
本名は寺田寅彦
物理學者
理學博士
東京帝國大學教授
明治十一年高知縣生

はなし。我々夫婦が代らん。」と立寄れば、松王丸、いや／＼これは我が子にあらず。菅秀才の亡骸を御供申す。いづれもは、門火門火。」と、門火を頼み頼まるゝ、御臺若君諸共に、しやくり上げたる御涙。冥途の旅へ寺八の師匠は彌陀佛、釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろは書く子のあへなくも、ちりぬる命是非もなや。あすの夜たれか添乳せん。らむうい目見る親心、劍と死出の山けふこえ、あさき夢見し心地して、跡は門火にゑひもせず。京は故郷と立別れ、鳥邊野さして連れ歸る。

(菅原傳授手習鑑)

一四 科學者と藝術家

吉村冬彦

藝術家にして科學を理解し愛好する人も無いではない。又科

學者で藝術を鑑賞し享樂する者も随分ある。しかし藝術家の中には科學に對して無頓着であるか、或は場合によつては一種の反感を抱くものさへある様に見える。又多くの科學者の中には藝術に對して冷淡であるか、或は寧ろ嫌忌の念を抱いて居るかのやうに見える人もある。場合によつては藝術を愛することが科學者としての墮落であり、又恥辱である様に考へて居る人もあり、或は文藝といふ言葉から直ちに不道德を聯想する潔癖家さへ稀にはある様に思はれる。

科學者の天地と藝術家の世界とはそれほど相容れぬものであらうか。これは自分の年來の疑問である。夏目漱石先生が嘗て科學者と藝術家とは、其の職業と嗜好とを完全に一致させ得るといふ點に於て共通な者であるといふ意

講演
「文藝の哲學的
基礎」と題する
講演

味の講演をされた事があると記憶して居る。勿論藝術家も時として衣食の爲に働かなければならぬと同様に、科學者も亦時としては同様な目的の爲に自分の嗜好に反した仕事に骨を折らなければならぬ事がある。併し其の様な場合にても、其の仕事の中に自分の天與の嗜好に逢着して、何時の間にかそれが仕事であるといふ事を忘れ、無我の境に入り得る機會も少なくなひ様である。況や衣食に窮せず、仕事に追はれぬ藝術家と科學者とが、それ／＼の製作と研究とに没頭して居る時の特殊な心的情態は、其の間に何等の區別をも見出し難い様に思はれる。尤もそれだけのことならば、或は藝術家と科學者とのみに限らぬかも知れない。獵師が獲物を狙つて居る瞬間に經驗する機微な享樂も、樵夫が大木を倒す時に味はふ一種の本能満足も、こ

れと類似の點がないとはいはれない。しかし科學者と藝術家との生命とする所は創作である。他人の藝術の摸倣は自分の藝術でないと同様に、他人の研究を繰返すのみでは科學者の研究ではない。勿論兩者の取扱ふ對象の内容には、比較にならぬ程の差別はあるが、其處には又可なり共有な點がないでもない。科學者の研究の目的物は自然現象であつて、其の中に何等かの未知の事實を發見し、未發の新見解を見出さうとするのである。藝術家の使命は多様であらうが、其の中には廣い意味に於ける天然の事象に對する見方と其の表現の方法とに於て、何等かの新しいものを求めようとするのは疑もない事である。又科學者が此の様な新しい事實に逢着した場合に、其の事實の實用的價值には全然無頓着に、其の事實の奥底に徹底するまでこれを

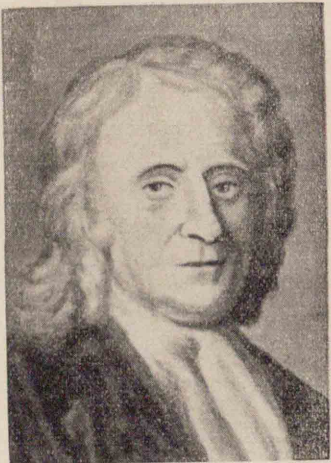
突きとめようとすると同様に、少なくとも純真なる藝術が一つの新しい觀察・創見に出逢つた場合には、其の實用的の價值などには顧慮する事なしに、其の深刻なる描寫表現を試みるであらう。古來多くの科學者が此の爲に迫害や愚弄の焦點となつたと同様に、藝術家が其の爲に悲惨な境界に沈淪せぬまでも、世間の反感を買つた例は尠なくあるまい。此の様な科學者と藝術家とが相逢うて肝膽相照すべき機會があつたら、二人は恐らく會心の握手をかはずに躊躇しないであらう。二人の目指す所は同一な眞の半面である。

世間には科學者に一種の美的享樂がある事を知らぬ人が多いやうである。しかし科學者には科學者以外の味はふ事の出來ぬやうな美的生活があることは事實である。例へば古來の數

ニュートン
Newton (1642—1727)
英國の有名な物理學者

ヴォルテール
Voltaire (1694—1778)
佛國の啓蒙哲學者

フォークト
F. Vogt (1817—1895)
獨逸の科學者



學者が建設した幾多の數理的の系統は、其の整合の美に於て、恐らくあらゆる人間の製作物の中で最も壯麗なものであらう。物理・化學の諸般の法則は勿論、生物現象中に發見される調和的・普遍的の事實にも、單に理性の満足以外に吾人の美感を刺戟することは少なくない。ニュートンが一見捕捉し難い様な天體の運動も簡單な重力の法則によつて整然たる系統の下に一括されることを知つた時には、實際ヴォルテールの謳つた様に、神の聲と共に渾沌は消え、闇の中に隠れた自然の奥底は其の帷帳を開かれて、玲瓏たる天界が眼前に現れた様なものであつたらう。フォークトは其の結晶物理學の

冒頭に於て、結晶の整調の美を管絃樂に譬へて居るが、又最近學者の研究によつて始めて明かになつた結晶體の分子構造の如きものに對しても、多くの人は一種の美に酔はされぬわけに行かぬことと思ふ。此の種の美感は、例へば壯麗な建築や崇重な音樂から生ずるものと根本的に可なり似通つたところがある様に思はれる。

又一方に於て、藝術家は科學者に必要なと同程度若しくはそれ以上の觀察力や分析的の頭腦をもつてゐなければなるまいと思ふ。此の事は或は多くの藝術家自身には自覺してゐないことかも知れないが、事實はさうでなければなるまい。如何なる空想的・夢幻的の製作でも、其の基底には鋭利な觀察によつて複雑な事象を其の要素に分析する心の作用がなければなるまい。

若しさうでなければ、一木一草を描き、一事一物を記述するといふ事は不可能である。そして、其の觀察と分析と其の結果の表現の仕方とによつて、其の作品の藝術としての價值が定まるのではあるまいか。

或人は科學を以て現實に即したものと考へ、藝術の大部分は想像或は理想に關したものと考へるかも知れないが、此の區別は餘り明白なものではない。廣い意味に於ける假説なしには科學は成立し得ないと同様に、嚴密な意味で現實を離れた想像は不可能であらう。科學者の組立てた科學的系統は、畢竟するに人間の頭腦の中に築きあげ造り出した建築物・製作品であつて、現實其の物でないことは哲學者を俟たずとも明白な事である。又一方に於て、藝術家の製作物は、如何に空想的のものである。

味に於て、皆現實の表現であつて、天然の法則の記述でなければならぬ。俗に繪そらごとといふ言葉があるが、立派な科學の中にも、嚴密に詮索すれば繪そらごとは數へ切れぬ程ある。科學の理論に用ひられる方便假説が現實と精密に一致しなくても、差支ないならば、謂はゆる繪そらごとも少しも虚偽ではない。分子の集團から成る物體を連續體と考へてこれに微分方程式を應用するのが不思議でなければ、色の斑點を羅列して物象をあらはすことも、少しも不都合ではない。

もう少し進んで、科學は客觀的、藝術は主觀的のものであるといふ人もあらう。しかしこれもさう簡単な言葉で區別の出来るわけではない。萬人は普遍であるといふ意味での概念は段々に吾人の五官と遠ざかつて来る。従つて普通人間の客觀とは

プランク

Max Planck
(1858—
學者 獨逸の物理)

立體派

Cubism

未來派

Futurism

次第に縁の遠いものになり、謂はば科學者といふ特殊な人間の主觀になつて来るやうな傾向がある。近代理論物理学の傾向がプランク等の言ふ如く次第に「人間本位の要素」の除去にあるとすれば、其の結果は一面に於て大いに客觀的であると同時に、又一面に於ては大いに主觀的なものとも謂へないことはない。藝術界に於ける立體派や未來派が直接五官の印象を離れた概念の表現を試みてゐるのと可なり類した所がないでもない。次に自然科学に於ては其の對象とする事物の「價值」は問題とならぬが、其の研究の結果や方法の學術的價值には自ら他に標準がある。藝術の爲の藝術では其の取扱ふ物の價值より其の作物の藝術的價值が問題になる。さうして後者の價值といふことがむづかしい問題であると同様に、前者の價值といふことも

嚴密には定め難いものである。

科學の法則や事實の表現はこれを言表はす國語や方程式の形の如何を問はぬ。しかし藝術は事物そのものよりはこれを表現する方法にあるとも言はば言はれぬ事はあるまい。しかしこれもさう簡單ではない。成程科學の法則を日本語で譯しても英語で現しても、それは問題にならぬが、しかし法則自身が自然現象の一種の言表はし方であつて、事實そのものではない。

唯言表はすべき事柄が比較的簡單である爲に、表はし方が多様でないばかりで、必ずしも唯一ではない。藝術の表現しようとするものは、寫してある事物自身ではなくて、それによつて表はさるべき「或物」であらう。唯其の「或物」を表はすべき手段が一様でない、國語が一定しない。しかし強ひて言へば、一つの藝術品

スケッチ
Sketch

は或言葉で表はした一つの事實の表現であるとも謂はれぬことはない。然らば植物學者の描いた草木の寫生圖や、地理學者の描いた風景のスケッチは藝術品と謂はれるかといふに、それは勿論違つたものである。何故とならば、事實の表現は必ずしも藝術ではない。繪を描く人の表はさうとする對象が違ふからである。科學者の描寫は草木山河に關した或事實の一部分であるが、藝術家の描かうとするものはもつと複雑な「或物」の一面であつて、草木山河はこれを表はす言葉である。しかし其の作物は作家だけの主觀に存するものでなくて、ある程度までは他人にも普遍的に存する物でなければ、鑑賞の目的物としての謂はゆる藝術は成立せず、従つてこれの批評などといふことも無意味なものとなるに相違ない。此の「或物」を強ひて言語や文

字で表はさうとしても無理なことであらうと思ふが、自分は唯密かに此の「或物が科學者の所謂事實」と稱し、法則」と稱するものと相去ること遠からぬものであらうと信じて居る。(萬華鏡)

一五 狩野芳崖

岡倉覺三

岡倉覺三
美術鑑賞家
東京美術學校長
江戸生
大正二年卒
年六十二
無量光明
從レ是西方過二十
萬億佛土有世界
界一名ニ曰ニ極
樂。其土有佛。
號ニ阿彌陀。……
彼光明無量、照
十方。無所不障
礙。(阿彌陀經)
五欲
耳目口鼻の欲と
愛情の欲

一幅の濃淡、人天相分る。上は則ち無量光明の淨界なり、下は則ち五欲昏迷の穢土なり。大士の容顏端嚴にして、愁に和して微笑を含み、左手に楊柳を撚し、右手に寶瓶ほうびやうを傾け、瀉ぎ來る無明空中一滴慈悲の水は清魂の人間に歸るを送るものなり。赤子の合掌して仰いで菩薩を見るものは、無知清淨にして餘念を懷かず。亂山突兀、暮雲暗澹、煙冷かに風荒る。憐むべし、呱々たる阿孺何處にか墜下し去りて、憂悲煩惱の長夜に迷ひ、那邊の淨地に



(藏校學術美京東) 筆崖芳野狩 像音觀母悲

向つて如意心蓮を發き、再び慈悲の海に遡るを得ん。嗚呼、是芳

崖狩野翁が畢生の傑作觀音大士の像なり。
翁嘗て人に語つて曰く、人生の慈悲は母の子を愛するに若くは
なし。觀音は理想的の母なり、萬物を發生煦育する大慈悲の精



岡 倉 下
村 觀 山
三 覺 筆

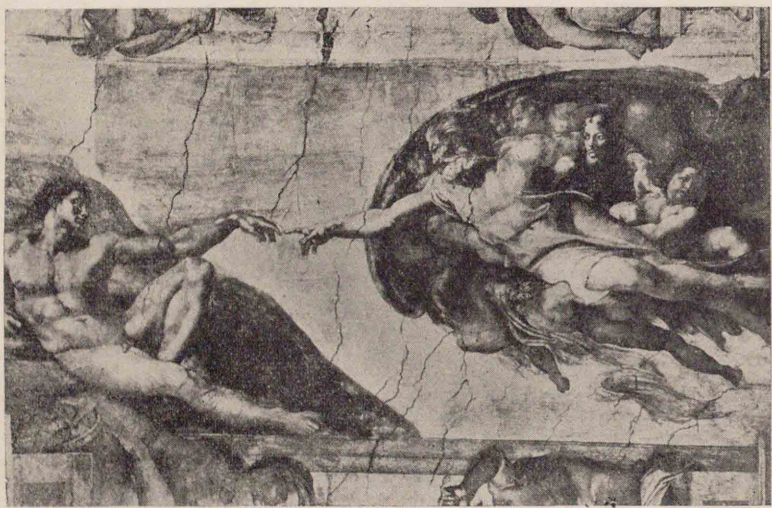
神なり、創造化育の本因な
り。余此の意象を描かん
と欲する、こゝに年あり。
未だ適當なる形相を得ず。
と。此の圖は翁が最終の

揮毫に係り、長逝に先だつこと纔かに四日、畫き了へて、未だ款を
署するに至らざりしものなり。蓋し翁平生の心事此の一幅畫
中に留存するものあらん。其の筆墨の沈着醇厚にして、其の賦

ミケランジェロ
Michael Angelo
(1475-1564) 伊太利の畫家
彫刻家 詩人

色の明麗渾融なるは近世多く比類を見ず。特に意匠の高尙秀絶なるに至りては、技道に進む者にして、遙かに古人を凌駕せんとす。尋常一樣、墨を玩び筆を弄し、花天月地に風流三昧を事とする者と時を同じうして語るべからず。彼のミケランジェロの畫きたる創造の圖は歐洲美術の神品と稱すべく、氣力豪邁にして布置雄大、唯見る、雲間の上帝雙手を伸して大地を指し、倏忽一個の壯士を現出するを。彼は則ち上帝の命令念力を以て人を創造するなり。是は則ち觀音の慈悲法力を以て人を發育擁護するなり。佛家發生の深理は自ら基督教造物の主旨と異なる所あり。其の美術上の形相も亦隨つて同じからず。人若し畫中の心情を看破し去らば、豈妙悟の天外より落つるなからんや。憐むべし、此の超凡の絶技を抱きたる人は、未だ天下に名を成す

文政十一年
仁孝天皇の御代
(西八)



馬羅 司馬 天堂 井畫 米 羅 翁 筆

能はずして空しく黄泉の客となれり。然れども翁の妙想は竟にミケランジェロをして美を擅にせしめざりしなり。
翁姓は狩野、文政十一年正月十三日、長州に生る。幼名幸太郎。父を晴臯と曰ふ。家世、萩藩の畫師たり。父、性豪毅にして俠氣あり。自ら信ずること頗る固く、其の子を訓ふるに甚だ嚴正なり。

翁が勇邁果敢の氣力は多く嚴君の鍛錬による。母、溫柔貞淑、其の愛育慈養は翁の常に追念したる所にして、後年觀音の畫ある所以も亦此に基づく。翁の豪懷英氣、風雲を叱咤する筆を以て、時として情致纏綿、曉露の海棠に墜つるが如き一種幽婉の變體あらしめたるも、亦故あるかな。

木挽町狩野畫所
徳川幕府奥向の
繪を掌り門生を
も養ふ
狩野四家の一

安政六年
孝明天皇の御代
(二五二)

年十九にして始めて江戸に來り、木挽町狩野畫所に入る。爾來十有餘年、螢雪の功を積み、狩野門流の正格を練磨し、非凡の精妙を顯し、當時秘訣と稱したる師門の口傳の如きも、暗合默會して先輩を驚かし、巍然として、畫所屈指の名手たり。安政六年、江戸城本丸焼失す。再建に當り、大廣間天井の裝飾は翁選ばれて之を託せらる。然れども翁の心は未だ大いに安んぜざるものあり、一朝自ら悟る所ありて、遂に別天地を開かんとするに至れり。

周文
室町時代の畫僧
京都の相國寺に
ゐた
玉潤
支那南宋の畫僧
若芬の號
夏明遠
支那南宋の畫家
仇英
支那明代の畫家
雪舟
室町時代の畫僧
馬遠
支那南宋の畫家
夏珪
支那南宋の畫家
相阿彌
室町時代の畫家

當時狩野の畫風漸く衰微に瀕し、粉本摸寫の弊最も盛にして、周文の遠山に玉潤の雁陣を横たへ、夏明遠の樓閣に仇英の人物を坐せしめ、以て自家の製作となすもあり。當時の一幅の丹青を解剖し去らば、雪舟の樹木巖石、馬遠の蘆荻流水、夏珪の牧牛、相阿彌の歸帆を點々排列するに過ぎず。畫家の新案に係るものは、纔かに雲煙と落款とのみ、翁の洞然大觀して自ら破格を企てたるは洵に已むを得ざりしなり。一日童子あり、戲に虎を畫く。眼は是兩々の丸子、耳は是雙々の遠山、脚は是四竿の老竹、斑文五六點、鬚毛兩三絲、添ふるに長大の尾を以てす。翁觀て大いに喜び、起舞して歎じて曰く、是なる哉、是なる哉。雪舟の骨、雪村の氣、亦之に外ならず。畫の要は一意直到、唯心裏の影を以て紙上の形となすに在り。意盡くる所は則ち筆の盡くる所なり。氣力

橋本雅邦

畫家

東京美術學校教

授

明治四十一年卒

年七十四

満盈の間、豈一點の間筆を着くべけんや」と。是よりして筆墨を童子に與へ、白紙を以て其の畫く所に換へ、之を祕笈に藏し、夜靜かに人定まる後、孤燈を剪つて之を展覽し、畫中の上乘禪に悟入する所あり。此の時に於て翁の心事を解し、共に破格を期したるは、獨り橋本雅邦氏なりき。氏は翁と同日畫所に入る、時に年十三歳なりといふ。此の兩畫伯、一は雄拔奇豪、一は渾厚着實、共に表裏提携し、新畫の端緒を開きたるは亦奇縁といふべし。心機漸く熟して形相未だ成らず。新に生面を開きたる者の通弊として、忽ちにして奇僻に陥り、怪詭百出、滿幅の風雲魑魅魍魎を奔らせて同門の嘲を招き、師家の罵に遭ひぬ。されど、翁自ら信ずる所あり、敢へて一步を退かざりき。憾むらくは世を舉つて俗陋、翁を知る者甚だ罕なり。慘澹辛苦嘗めざるなく、其の死

に先だつこと兩三年、始めて其の心機と形相と調和するを得て、畫法の自在を成したる者の如し。觀音其の他の傑作に至つては、畫格遠く古大家に入り、人をして驚絶せしむるに足ると雖も、其の巧妙は既成の形相に非ずして、寧ろ含蓄にあり、未敷蓮華の香を包み、秋雲の雷電を藏するが如し。惜しいかな、未だ大いに其の圓熟縱横の妙を揮ふに及ばずして逝く、年六十一。時に明治二十一年十一月五日なり。

翁人となり、内、忠實溫順にして、外、高邁俊逸なり。其の父母に至孝なるは郷閭の知る所にして、勝川門下に遊學したる時の如きは、一身節儉を守り、潤筆を得ても之を私せず、郷里に送り、以て父母旦夕の料に供したりといふ。技藝の上に在りては、虚心坦懷、好んで人に問ひ、門下子弟の説と雖も、苟も取るべきあれば、喜び

勝川

狩野家の畫家

名は雅信

明治十三年歿

年五十八

拜して之を容れ、其の圖様を改むること屢なり。其の自ら信じたる所を説くに至つては貴賤親疎の別なく、長談雄辯して必ず意を盡さざれば歇まず。翁又謠曲を愛し、舞を好む。常に舞法の畫法と同一なる所以を説き、得意の事に得意の人に遇へば、婆娑として起舞し、旁に人なきが若し。蓋し畫伯眼中唯畫あるのみ。顧ふに美術の大家たるものは自ら一家の美學を有するものなり。或は心に感じて口に之を言ふ能はざるものあり、或は默契して言ふを好まざるものあり。翁の如きは之を言ふを喜びたるものなり。翁は畫理を以て天地萬物の眞理を發明せんと試み、佛家禪僧の妙悟、漢儒西哲の深旨、總べて丹青鏡裏に照映して其の意義を判し、得失を論じ、仁義道德の大道、坐臥進退の庸行に至るまで、盡く取りて以て畫訣とせり。翁常に言ふ、人生各自獨

立の宗教なかるべからず。美術家の宗教は美術宗あり。復何ぞ之を他に求めんや」と。亦以て其の造詣を見るに足るべし。

(國華)

一六 吾妻下り

むかし男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらし、東の方に住むべき國求めにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ處にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく川の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。その澤の邊の木の陰におりゐて、餉かたじけなくひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見て、ある

八橋
今の愛知縣三河國碧海郡牛橋村八橋
刈谷驛の北四軒餘

人のいはく、かきつばたといふ五文字を句の上にするて旅のこ
ころをよめ。いひければ、よめる。

からころも

きつゝなれにし

つましあれば

はるくゝ來ぬる

たびをしぞ思ふ

とよめりければ、みな人餉の上
に涙落して、ほとびにけり。

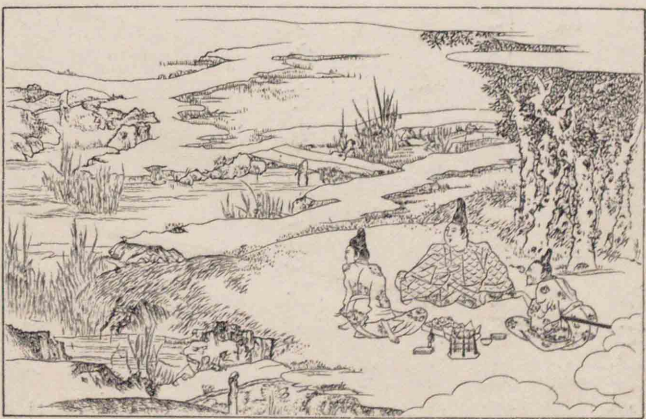
ゆきくゝて駿河國にいたりぬ。

宇津山にいたりて、わが入らむ

とする道はいとくらうほそきに、葛かづらはえしげり、物心ほそ

宇津山

今の静岡縣駿河
國志太郡岡部町
の邊
静岡市の西南十
六料



橋

八

く、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かゝる
道にはいかでかいまする。」といふを見れば、見し人なりけり。京
にその人のもとにとて、文書きてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも

夢にも人のあはぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに雪いと白う降り。

時知らぬ山はふじの嶺いつとてか

かのこまだらに雪の降るらむ

その山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたら
むほどして、形は鹽尻のやうになむありける。

なほゆきくゝて、武藏の國と下總の國との中に、いと大きな川
あり、それを隅田川といふ。その川の邊に群れゐて思ひやれば、

鹽尻
鹽田で砂を圓く
積んで塚のやう
にしたもの

かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に
乗れ、日も暮れぬ。」といふに、乗りて渡らむとするに、皆人ものわび
しくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴
と足と赤き、鴨の大ききなる、水の上に遊びつゝ、魚を食ふ。京に
は見えぬ鳥なれば、皆人見しらず。渡守に問ひければ、これなむ
都鳥。」といふを聞きて、

名にし負はばいざこととはむみやこ鳥

わがおもふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。(伊勢物語)

一七 隅田川

シテ
梅若丸の母

ワキ詞「これは武藏の國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ、人

子方

梅若丸の幽霊

ワキ

渡守

ワキツレ

旅人

處

武藏

季

三月

人を渡さばやと存じ候。又此の在所にさる子細有つて、大念佛
を申す事の候間、僧俗を嫌はず人^{ひと}數を集め候。其の由皆々心得
候へ。^{ワキツレ}末も吾妻の旅衣、日も遙々の心かな。^{ワキツレ}斯様に

候者は都の者にて候。我吾妻に知る人の候程に、彼の者を尋ね

て、唯今罷り下り候。^{道行}雲霞あと遠山に越えなして、いく關々

の道すがら、國々過ぎて行く程に、こゝぞ名におふ隅田川、渡に早

く着きにけり。^{ワキツレ}急ぎ候程に、これは早隅田川の渡にて候。

又あれを見れば舟が出で候。急ぎ乗らばやと存じ候。いかに

船頭殿、舟に乗らうずるにて候。^{ワキ詞}なか／＼のこと、めされ候

へ。まづ／＼御出で候後の、けしからず物騒に候は何事にて候

ぞ。^{ワキ}さん候、都より女物狂の下り候が、是非もなく面白う狂ひ

候を見候よ。^{ワキ}さやうに候はば、暫く舟をとめて、彼の物狂

人の親の

人の親の心は闇
にあらねども子
を思ふ道に惑ひ
ぬるかな

(後撰集、藤
原兼輔)

聞くやいかに

聞くやいかに上
の空なる風だに
も松に音する習
ありとは

(新古今集、
宮内卿)

を待たうざるにて候。

「實にや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひしら雪の、道行人に言づてて、行方を何と尋ねらん。聞くやいかに、上の空なる風だにも、地松に音する習あり。

「真葛が原の露の世に、地身を恨みてや、明け暮れん。これ

は都北白川に年経て住める女なるが、思はざる外に獨子を人商人に誘はれて、行方を聞けば、逢坂の關の東の國遠き吾妻とかやに下りぬと聞くより、心亂れつゝ、そなたとばかり思子の跡を尋ねて迷ふなり。千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、

契假なる一つ世の其の中をだに添ひもせて、こゝやかしこに親と子の四鳥の別れこれなれや。尋ねる心の果やらん、武藏の國と下總の中にある隅田川にも着きにけり。

四鳥の別れ

桓山之鳥生ニ四
子。羽翼既成、
將分ニ于四海。
其母悲鳴而送
之。(孔子家語)

「のうく、我をも舟に載せて賜はり候へ。これは都より人を尋ねて下る者にて候。都の人といひ、狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずば此の舟には載せまじいぞとよ。



隅田川 卷坂 耕漁 筆

「うたてやな、隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ、舟に乗れとこそ承るべけれ。かたの如くも都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも覚えぬ事なのたまひそよ。都の人とて、名にし負ひたる優しさよ。

昔にかへる
いとしく過ぎ
にし方の戀しき
にうらやましく
もかへる波かな
(伊勢物語)

の詞はこなたも耳に留るものを。彼の業平も此の渡にて、名にしおはばいざ言問はん都鳥、我が思ふ人は有りやなしやと。語「のう、舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワキ「あれこそ沖の鷗候よ。シテ「うたてやな、浦にては千鳥ともいへ、鷗ともいへ、など此の隅田川にて白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ。ワキ「げに、誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ「沖の鷗といふ波の、ワキ「昔にかへる業平も、シテ「有りや無しやと言問ひしも、ワキ「都の人を思ひ妻、シテ「わらはも吾妻に思子の、ゆくへを問ふは同じ心の、ワキ「妻を忍び、シテ「子を尋ぬるも、ワキ「思は同じ、シテ「こひぢなれば、地歌「我も亦いざ言問はん都鳥、我が思子は東路に、有りやなしやと問へども問へども答へぬは、うたて都

舟ぎほふ
舟ぎほふ堀江の
川のみなぎはに
來居つゝ鳴くは
都鳥かも
(萬葉集)

鳥、鄙の鳥とやいひてまし。實にや舟ぎほふ堀江の川のみなぎはに來居つゝ鳴くは都鳥。それは難波江、これは又隅田川の東まで、思へば限なく遠くも來ぬるものかな。さりとは渡守、舟こぞりて狭くとも、載せさせ給へ、渡守、さりとは載せてたび給へ。ワキ「詞「かゝるやさしき狂女こそ候はね、急いで舟に乗り候へ。この渡は大事の渡にて候、かまひて靜かに召され候へ。男詞「のう、あの向ひの柳の下に、人の多く集りて候は何事にて候ぞ。ワキ「詞「さん候、あれは大念佛にて候。それにつきてあはれなる物語の候。この舟の向ひへ着き候はん程に、語つて聞かせ申さうずるにて候。語「さて去年三月十五日、而も今日に相當つて候。人商人の、都より年の程十二三ばかりなる幼き者を買取つて奥へ下り候が、此の幼き者、未だ習はぬ旅の疲にや、以ての外に違例

し、今は一足も引かれずとて、此の川岸にひれふし候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、此の幼き者をばその儘路次に捨てて、商人は奥へ下つて候。さる間、此の邊の人々、此の幼き者の姿を見候に、由ありげに見え候程に、様々に勞りて候へども、前世の事にもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、すでに末期と見えし時、おことはいづく如何なる人ぞと、父の名字をも尋ねて候へば、我は都北白川に吉田の某と申しし人の唯獨子にて候が、父には後れ、母ばかりに添ひ參らせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになり行き候。都の人の足手影も懐かしう候へば、此の道のほとりに築き籠めて、しるしに柳を植ゑてたまはれと、おとなしやかに申し、念佛四五返唱へ、遂に事終つて候。なんぼう哀れなる物語にて候ぞ。見申せば、船中にも少々都の人も御座ありげに候。

逆縁ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。由なき長物語に舟が着いて候。とう／＼御上り候へ。ツレいかさま今日は此の處に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうするにて候。ワキいかにこれなる狂女、何とて舟よりは下りぬぞ、急いで上り候へ。あらやさしや、今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。のう急いで舟より上り候へ。シテのう舟人、今の物語はいつの事にて候ぞ。ワキ去年三月今日の事にて候。シテさてその兒の年は。ワキ十二歳、シテ主の名は。ワキ梅若丸。シテ父の名字は。ワキ吉田の某。シテさて其の後は親とても尋ねず、ワキ親類とても尋ねこず、シテまして母とても尋ねぬよなう。ワキ思ひもよらぬこと、シテのう、親類とても親とても尋ねぬこそ理なれ、其の幼き者こそ、此の物狂が尋ねる子にては候へとよ。のう、これは夢かや、あら、

あさましや候。ワキ詞言語道斷の事にて候ものかな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや。あら、痛はしや候。かの人の墓所を見せ申し候べし。こなたへ御出で候へ。

シテ「今までは、さりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ吾妻に下りたるに、今は此の世になき跡の、しるしばかりを見ることよ。さても無慙や、死の縁とて、生所しんじょを去つて吾妻のはての道のほとりの土となつて、春の草のみ生ひ茂りたる此の下にこそ有るらめや。地」さりとは、人々此の土をかへして、今一度此の世の姿を母に見せさせ給へや。歌残りてもかひ有るべきは空しくて、有るはかひなき帚木の、見えつかくれつ面影の定なき世の習、人間憂の花盛、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲おほへり。げ

道のほとりの土

古墓何代人

不知姓與名

化作路傍土

年年春草生

(唐の白樂天)

帚木

蘭原や布施屋に

生ふる帚木のあ

りとは見えてあ

はぬ君かな

(坂上是則)

に目の前の憂き世かな。

ワキ詞「今は何と御歎き候ひてもかひなき事、たゞ念佛を御申し候ひて、後世を御弔ひ候へ。既に月出で、川風もはや更け過ぐる夜念佛の時節なればと、面々に鉦鼓を鳴らし勸むれば、シテ母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯ひれふして泣きゐたり。ワキ詞「うたてやな、餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ亡者も喜び給ふべけれど、鉦鼓を母に參らすれば、シテ我が子のためと聞けばげに、此の身も鳧鐘を取上げて、ワキ歎をとゞめ、聲澄むや、シテ月の夜念佛もろともに、ワキ心は西へと一すぢに、シテ南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛、地南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、シテ隅田川原の波風も、聲立て添へて、地南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿

鳧鐘

鳧氏鑄鐘

(周禮)

今一聲こそ
ゆきやらで山路
くらしつ時鳥い
ま一聲の聞かま
ほしさに
(拾遺集)

彌陀佛、シテ名にしおはば都鳥も音を添へて、地子方「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」シテ詞のうく、今の念佛の内に正しく我が子の聲の聞え候。此の塚の内にてありげに候よ。ワキ詞我等もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をばとゞめ候べし、母御一人御申し候へ。シテ今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛、子方「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と地聲の内より幻に見えければ、シテあれは我が子か、子方母にてましますかと、地互に手に手を取りかはせば、又消え消えとなり行けば、いよく思はます鏡、面影も幻も見えつかくれつする程に、東雲の空もほのく」と明け行けば、跡絶えて、我が子と見えしは塚の上の草茫茫々として、唯しるしばかりの淺茅が原となるこそあはれなりけれ。(觀世流謡曲)

加藤千蔭

號は芳宜園
江戸の國學者
文化五年(西六〇)

歿
年七十四

石濱

今の東京市淺草區眞土山・今戸、橋場一帶の地、隅田川の右岸向島の對岸

一八 石濱の雨

加藤千蔭

葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほとり石濱の庵に行きてやどりぬ。

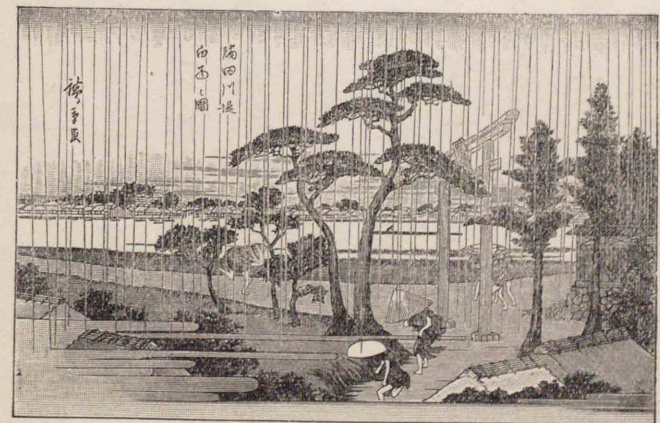


東京 加藤千蔭
帝室博物館藏

有明の月のにほひも、霧立ちわたる曉のさまも、處がら世に似ぬものから、こゝは雪のそぼ降る日なむ殊にあはれは深かりける。もとより萱ふける庵なれば、音だになくて、軒の

しづく三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるがほろくくと散るもあはれなり。水のおもては動くこともなく、鏡の如くなるに、雲の濃きうすきうつろひて、かつ浮びかつ消

ゆる水泡にこそ雨のけはひはしるかりけれ。みをの一筋は、さしひく潮にもまじらで、とはにはなだの色に流れいにて、沖に出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落ち来るならむ。うち向ふ岸の榛原のみ濃き墨がきの如くなるが中には、その黄ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひまぐより長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢はやうやうに淡墨もてかきけちたらむごとく、いとしもはるけきは、たゞなびかぬ煙とのみぞ見ゆる。



雨の隅田川の
安藤重筆

筏師の
隅田川藁着て下
す筏師にかすむ
あしたの雨をこ
そ知れ(千蔭)

こゝかしこより鳥の飛びゆきつゝ、ねぐらの鷺のつばさおもげにおき出でて川の瀬の眞菰におり立てば、みさごの群れきて水の面に浮べるもをかし。上つ瀬より筏師の藁笠きて棹を筏の上横たへ、おのれたむだきて思ふ事なげにてをり。筏は水のままに流れ行くもしづけし。渡守舟さし出せば、大笠かたぶけてわたり行く人の、やがて堤をあるくさまも、繪によく似たり。すべてひと日のうちに筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ来て、岸の木立も、長き堤も、あるはあらはれ、あるはかくれて、限なき青海原にむかひたらむやうにおほゆる折もありけり。かくてや、夕暮近くなりゆけば、むら鳥のおのがじし時もとむるに、雁の一つら二つらわたり行くなど、いはむかたなし。暮れはてても、猶行く水の色のみ遠く残りて、川添小田にいはへ

みくまりの神
水神森といふ
隅田川の上手の
左岸

るみくまりの神のみあかしの海人のいさりびともいふべく、か
すかに見えわたるもあはれなり。
秋ふけて小雨そぼふる隅田川

たが墨がきのすさびなるらむ (うけらが花)

一九 芳宜園大人

村田春海

村田春海
江戸の國學者
文化八年(三〇七)
歿
年六十六
文化の五年
光格天皇の御代
(二四六)
縣居
賀茂眞淵の家
江戸の濱町にあ
つた

こゝに文化の五年九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人の奥津
城の御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焚きて、うな
ねつきて申さく。
あはれ悲しきかも。君は吾に十といひて一年のこのかみにお
はするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの
齡におはして、吾はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物



村田春海
東京帝室博物館藏

まなびに行きかひたる時、あしたに参るとしては君のみはかしの
しりへに従ひ、ゆふべに罷るとしては君の御袖のもとに縋りて、相
うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならむ。書
讀むとては君を師とも尊み、歌作る
とては吾をおと、いのつらにぞ數
へ給ひける。中頃にして、君は仕へ
の道に暇なくおはし、吾は世のさが
にか、づらひて、おのづから疎き方
にも過ぎつるを、君つかへをしぞき
給ひて後は、吾も同じちまたに移り住めば、花を尋ぬとては吾道
しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乗り、憂き事も共に憂
へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふるわざのまめごと、あだ

くひげを守り
 宋人有耕田者。田中有株。兔走觸之。折其頸而死。因釋其耒而守株。冀復得兔。兔不可復得。而身爲宋國笑。 (韓非子)
 舟にきだつく
 楚有涉江者。其劍自舟中墜于水。遽刻其舟曰。是吾劍所從墜也。舟止。從其所刻處入水求之。舟已行矣。而劍不行。求劍若此。不亦惑乎。 (呂子春秋)

ごとも、かたみにへだてなく、心をかはせること今に二十年、その初を繰返し數ふれば、相友たること既に五十とせにぞ餘りける。さるを今後れ奉りて、いつの世にか相見む、何れの時にかこととはむ。常なきは人の身の習ぞと知れど、これをいかでか歎かさらむ、かゝるを誰かはよく堪へむ。
 あはれ悲しきかも、文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてて、古に復り、青雲の高き心しらひを求め、倭文機の文あるみやびごとを貴みいへれど、くひげを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥みこゝにひかれて、尙怪しみとがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君獨り心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌世に盛に

なりにたるなり。その自ら詠みいで給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりとに備らざるはなし。その古を寫せるは藤原、寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に盡さざることなく、目に觸るゝものは言葉に載せざることなむあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人、その名を君に知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。
 さるを、今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、大方の世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜まざらむ、かゝるを誰かは慕はざらむ。あはれ悲しきかも。わがかく言擧するを、泉の下にもさやかに聞召し、天

翔りても遙かに見そなはせとなむ申す。(琴後集)

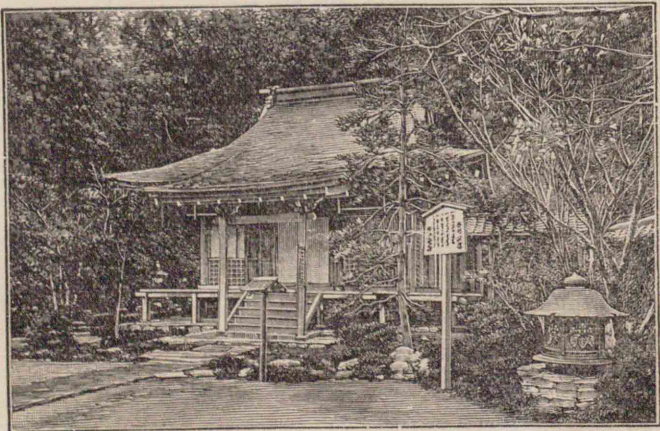
二〇 大原御幸

法皇
後白河法皇
建禮門院
平徳子
平清盛の女
高倉天皇の中宮
安徳天皇の御母
大原
京都府山城國愛
宕郡の山村
京都の北十六軒
北祭
賀茂の祭
四月中の酉の日
今は五月十五日

かゝりし程に、法皇は文治二年の春の比、建禮門院の大原の閑居の御住居御覽ぜまほしう思召されけれども、二月彌生のほどは嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解けず。かくて春過ぎ夏來りて北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。遠山にかゝる白雲は散りにし花の形見なり、青葉に見ゆる梢には春の名残ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日あまりの事なれば、夏草の茂みが末をわけ入らせたまふに、始めたる御幸なれば、御

覽じなれたる方もなく、人跡絶えたるほども思召し知られてあはれなり。

西の山の麓に一字の御堂あり。即ち寂光院是なり。舊う造りなせる泉水木立よしあるさまの處なり。「薨破れては霧不斷の香を焚き、扉落ちては月常住の燭を挑ぐ。」とは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波のうら紫に咲ける色、青葉交りの遅櫻初花よりも珍



院 光 寂

薨破れては
出所未詳

しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より山郭公の一聲も、君のみゆきを待ちがほなり。法皇これを叡覽あつて、かうぞ遊ばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて

波の花こそさかりなりけれ

舊りにける岸の絶間より落ちくる水の音さへ故びよしある處なり。綠羅の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及び難し。さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦朝顔這ひかゝり、しのお交りの忘草、瓢箪屢、空し、草顔淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す。ともいひつべし。板の茸目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に争ひてたまるべしとも見えざりけり。後は山前は野べいさゝを筐に風さわぎ、世に立たぬ身の習とて、憂

瓢箪屢、空し

瓢箪屢、空し、草
滋、顔淵之巷、藜
藿、深鎖、雨濕、原
憲之樞、(和漢朗
詠集、桶直幹)

き節しげき竹柱、都の方の言傳は間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとは、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら青つゞらくる人稀なる處なり。

法皇、人やある、人やある。と召されけれども、御いらへ申す者もなし。やゝありて老い衰へたる尼一人参りたり。女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。と仰せければ、この上の山へ花摘に入らせたまひて候。と申す。さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや。御痛はしうこそ。と仰せければ、この尼申しけるは、五戒十善の御果報盡きさせたまふによりて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜ませたまひ候べき。とぞ申しける。この尼の有様を御

十善

不殺生
不偷盜
不邪淫
不妄語
不兩舌
不惡口
不綺語
不貪欲
不瞋恚
不邪見

紀伊二位
信西の妻朝子
紀伊守範元の女

覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬものを結び集めてぞ着たりける。「あの有様にてもかやうのことを申す不思議さよ。」とおぼしめして、抑、汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、この尼さめくくと泣いて、しばしは御返事にも及ばず。やゝありて涙をおさへて、申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女阿波内侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせたまふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。」とて、袖を顔に押しあてて忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇げにも汝は阿波内侍にてあるごさんなれ。御覽じ忘れさせたまふぞかし。何事につけても只夢とのみこそ思召せ。」とて御涙せきあへさせたまはねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かな。」

善導
唐の高僧
八軸の妙文
法華經
九帖の御書
善導和尚の觀無量壽經の疏



建禮門院御像
山城國大原寂光院藏

と思ひたれば、理にて申しけり。」とぞ各、感じあはれける。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子をひきあけて觀覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を懸けられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚並に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を觀覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾など懸けられたり。さしも本朝漢土の妙なる類數を盡し綾羅錦繡の粧も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流

させ給へば、供奉の公卿、殿上人も、まのあたり見奉りし事ども今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。
やゝあつて、上の山より濃き墨染の衣着たりける尼二人、岩のかけちを傳ひつゝ、おり煩ひたる様なりけり。法皇、あれはいかなる者ぞ。と仰せければ、老尼涙を抑へて、花筐臂にかけ、岩躑躅取具して持たせたまひて候は女院にて渡らせたまひ候。爪木に蕨折添へて持ちたるは鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言典侍局（のつむぎ）と申しもあへず泣きけり。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿、殿上人も皆袖をぞ濡されける。女院は世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有様を見えまゐらせんずらんはづかしさよ。消えも失せばや。と思召せどもかひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起

大納言典侍局
平重衡の室

の袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせたまひけん、山へも歸らせたまはず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましくゝたる處に、内侍の尼參りつゝ、花筐をば賜はりけり。

世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。早々御見參ありて、還御なし參らせ候へ。と申されければ、女院御涙を抑へて御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな。とて御見參ありけり。

女院涙を抑へて申させたまひけるは、今かゝる身になり候ことは一旦の歎申すに及び候はねども、後生菩提のためには悦と覺え候なり。いつの世にも忘れ難きは先帝の御面影。忘れんと

すれども忘れられず、忍ばんとすれども忍ばれず。たゞ恩愛の道ほど悲しかりけることはなし。されば、かの御菩提のために、朝夕の勤怠ること候はず。これも然るべき善知識とおぼえ候。」と申させたまへば、法皇仰なりけるは、人間のあだなる習、今更驚くべきには候はねども、御有様見參らせ候に、せん方なうこそ候へ。」とて、御涙せきあへさせたまはず。〔平家物語〕

二一 愚禿親鸞

西田幾多郎

余は眞宗の家に生れ、余の母は眞宗の信者であるに拘らず、余自身は眞宗の信者でもなければ、また眞宗に就いて多く知るものでもない。たゞ上人が在世の時、自ら愚禿と稱し、此の二字に重きを置かれたといふ話から、余の知る所を以て推すと、愚禿の二

親鸞
浄土眞宗の開祖
弘長二年(一三三〇)
寂
年九十
西田幾多郎
哲學者
文學博士
京都帝國大學名譽教授
明治三年加賀國金澤生

字は能く上人の人となりを表はすと共に、眞宗の教義を標榜し、兼ねて宗教そのものの本質を示すものではなからうか。



しいかに大なりとも、人間の
親 智は人間の智であり、人間の
鸞 徳は人間の徳である。三角
上 形の邊はいかに長くとも、總
人 べての角の和が二直角に等
しいといふには何の變りも

なからう。たゞ翻身一回、此の智、此の徳を捨てた所に、新たな智を得、新たな徳を具へ、新たな生命に入る事ができるのである。是が宗教の神髓である。宗教のことは世の所謂學問・知識と何等交渉

い様であるが、眞宗は特に此の方面に着目した宗教である、愚人、悪人を正因とした宗教である、絶對的愛、絶對的他力の宗教である。いかなる愚人、いかなる罪人に對しても、彌陀はたゞ汝の爲に我は粉骨碎身せりといつて、之を迎へられるのが眞宗の本旨である。

終りに宗祖其の人の人格に就いて見ても、彼の日蓮上人が意氣冲天、他宗を罵倒し、北條氏を目して、小島の主等が云々」と壯語したのに比べて、吉水一門の奇禍に連なり、北國の隅に流されながら、若し我配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん。』といつて、法を見て人を見なかつた親鸞上人の人格は、頗る趣を異にしたものと謂はねばならぬ。風號び雲走り、怒濤澎湃の間に立つて、動かざること巖の如き日蓮上人の意氣も壯なことは

吉水一門

東山の吉水で淨

土宗を説いた源

空即ち法然上人

の門弟たち

北國の隅に

親鸞は承元元年

(一六六)越後に流

され五年目に漸

く赦された

壯ではあるが、煙波渺茫、風靜かに波動かざる親鸞上人の胸懷は、また何となく奥床しいではないか。(思素と體驗)

三三 月の前

上田秋成

上田秋成

國學者

文化七年(一四七〇)

歿

年七十八

鎌倉の大將

右近衛大將源賴

朝

文治そのの年八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかうまつる人々、御前まへおひ、御あとべつかうまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾からず、遅からず、つらを亂さず、ねり出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、かしこみ、たいまつれる人数多あるに、お前拂ひして、あなただにいはせず、よにかめしく、貴き御有様なり。かへりまをしして、御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣のもとに畏まりをる法師のあなるが、見上げ奉るつらつき、なほ人ならず思しけむ、御輿ぞひの若侍

圓位
西行法師

穴熊セントスの
西伯將レ獵トス
之ヲ曰ク非ズ龍ニ非ズ
影ニ非ズ熊ニ非ズ熊ニ
非ズ貌ニ非ズ虎ニ所ニ
獲ル王ノ輔ト
果テ遇フ呂尚於渭
水之陽ト。(史記)

して問はせ給ふ。ゆくりなきに驚きたる様して、雲水にありか
定めず侍るものにて、名は圓位と申す。といふ。聞召されて、され
ばこそ聞知りたれ。穴熊のたけき獲物の類ならで、賢き人得た
るためしに、誘ひかへらむ。わがあとに連れて來れといへ。とて
召連れさせ給へり。
御館に入らせ御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあま
た照しか、やかせ給ひて、おまし近き處の一間なる簀子に召さ
れたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御宮仕せし
人の世をはかなきものに思ししみて、身は黒うやつしたれど、月
花のなげきの譽は、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。弓取る
人のもとの心の猛きには、よむ歌も直くあからさまと聞くはま
ごとか。歌は武士のあらくしき心には詠みうつすまじきも

大風起り

大風起リ兮雲飛揚
揚ス威加海内
兮歸故鄉
(漢の高祖)
烏鵲南に
月明星稀烏鵲
南飛
(魏の曹操)

のに宮人たちは沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、笛鼓の音、馬
の嘶は物とも思はぬを、このみそぢ餘りのまなびには心のおく
る、はいかに。「こはかしこき御心にもおぼし惑はせ給ふもの
か。古の代々の帝は、馬の鞍おき、弓矢とらして、軍に立たせ給ひ
き。その御歌をよみ奉れば、猛く直く、調もいと高しとこそ打聞
き侍れ。いでや歌詠まんとては、益荒雄心をとり隠し、あてにな
よびかにのみ詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき煩な
れ。君がさとくたけき御心のま、にうちいで給はむには、今の
世の人たれかは立ちあへ奉らむ。三尺の劍を執りて、大風起り、
雲飛揚す。と歌ひ、槩を横たへて、烏鵲南に」と詠ぜし君たちは、鞍の
上にて文に遊ばせ給ふならずや。といふ。人々、あれ聞き給へ。
世は捨て遁れても、頼しき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷

疽を病めるを
衛の吳起

といひしは世にいみじき弓矢の上手となむ聞ゆる。傳へたる
こともあるべし。かくこそと思ししみぬることは忘れずてこ
そあらめ。こと一言にても教へ承るべし。『こは益、恐ある御問
はせなり。つはものの道暫しも怠らせ給はぬ御心より、野山を
すみかの瘦法師にさへ物問はせ給ふことのかたじけなさよ。
向ひ奉りては、をこがましく家の傳なりなど聞え奉るべうも覺
え侍らず。ましてありがたき大宮仕をいなみ奉り、親のいつく
しみをさへあだなるものにして、年纔かに二十三にて家を出て
たるいたづらものの、弦ひき一つだに心に留めしことも侍らず。
たゞ一言の忘れがたきは、賞を重くし、罰を軽くせよ。』といひしと、
『任ずる者を辱むれば危し。』といひしとのありがたさよ。士卒の
疽を病めるを吮ひしは人の心をよく買ひなすと雖も、眞の情よ

竈を滅す
齊の孫臏

りとも覺え侍らず。竈を滅じて人を危きに落し入るゝは、將帥
のさかしきにて、國を治め天の下をしるべき君の御心にあらず。
軍を出したまへることの、あやしきまでかしこくませるを、餘所
ながら見聞き奉るには、この御問ゆるさせ給へ。』とて、額を板敷に
摺りつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ、口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜
ぞ。物語今は果してむ。人々と土器をとりはやし、曉かけて遊
ばむ。まれ人は酒飲まざるべし。鹿、猿のなかに立交りて歌よ
めといふともよむまじ。たゞわが前に遊べ。風冷かなるにも
飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は、煖かにこそ。この
火取、法師に參らせよ。』とて、白銀もてつくりたる猫のかたちした
るを取傳へて、君より賜ふとて、前に置きたり。鹿、猿は尙心たけ

し。鼠をだにえとらぬ瘦法師が爲には、似つかはしき御賜ぞ。」と

て、三度押戴きぬ。

あした御暇賜はりて立出づ

るに、御館の人宿りに、誰が殿

の童ならむ、くゝり袴の裾朝

露に濡れそぼちて、いと寒げ

にをるを見て、これ取らせむ。

火埋みて手足煖めよ。」とて、か

のきら／＼しき物を與へて、

顧みもせず立去りぬ。童が

主なる人、いとあやし。大將

殿の法師に賜はせしを、いかで童に得させけむ。」とて、まづ急ぎて、



西 菊 行地 容 法 師 筆

聞え奉る。君打笑み給ひ、かのえせ法師、あなづらはしくをさなげなる物くれしとて、腹だたくや思ひけむ、わが門の前に捨てゆきつるよ。法師とて、男魂なくば修行もえせぬなるべし。されど家を出でてなほ身を守り、才に誇りて、野山に交り、歌詠みてのみあるは、世捨人の捨てらるべきあさましさぞかし。一度汚れし物、その童に取らせよ。」とて、とりおろさせ給ひぬ。西行、後にこのことを人に語りていふ、右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の百度、曹孟徳の智略あるに似て天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、神の冥福といふものを生れながら得させけむ。ただ悲しむべきは、神の御裔の、この後やう／＼衰へさせ給はむ世の姿なるは。」とて、涙とゞめ難くして物語りつとなむ。心なき身

漢高 漢の高祖劉邦
曹孟徳 魏の曹操
孟徳はその字
心なき身にも
心なき身にもあ
はれは知られけ
り鳴立つ澤の秋
の夕暮
(西行法師)

にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずも、うちひそみぬべし。

(籐篋冊子)

深作安文

倫理學者

文學博士

東京帝國大學教

授

明治七年水戸生

徳川光圀

水戸第二世の藩

主

元祿十三年(三三)

薨

年七十三

二三 水戸學の精神

深作安文

水戸學は如何なるものかといふに、水戸義公即ち徳川光圀が大日本史の編纂を思ひ立つて、これに著手せられて以來、年月にして二百五十年、世代にして十二代の間、その子孫が此の事業を繼續して、遂にこれを完成するに至つたのと相並んで、水戸藩の藩主及び學者の間にその形を具へた所の國家主義的思想系統である。

水戸學を定義すると、大義名分を眼目として組立てられた日本の國民道德の系統であるといへる。此の學が水戸に起り、水戸

烈公

徳川齊昭の私諱

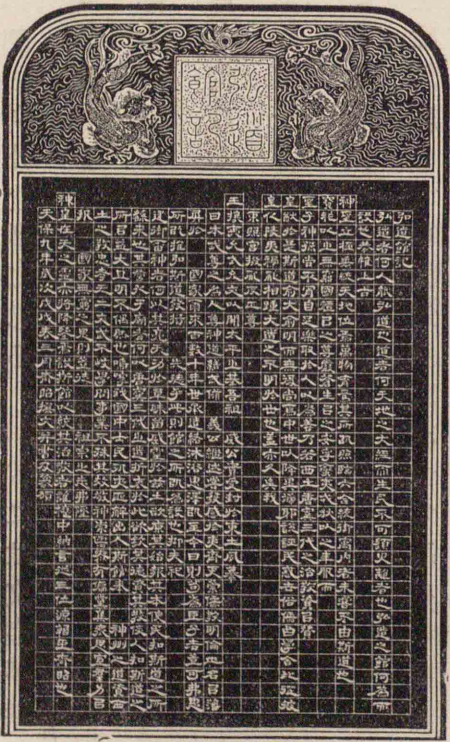
萬延元年(三三)

薨

年六十一

に發展して、諸藩の教學に影響し、終に明治維新の風雲を捲起す思想上の原動力となつた事は顯著な事實である。

水戸學の精神を窺ふに最も適當な文字は、同藩第九代の藩主烈



公がものせられた弘道館記である。その中に綱領と認むべきものが四箇條ある。

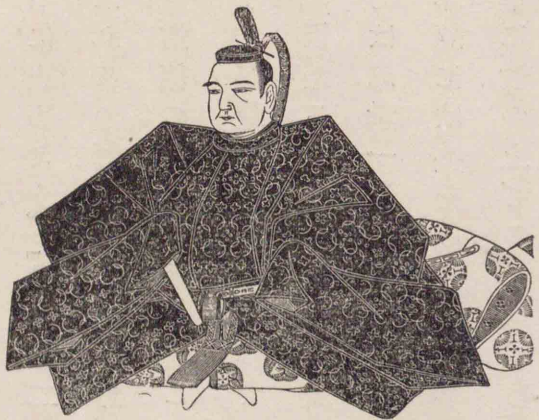
その一は、奉神

州之道資西土之教。その二は、忠孝無二。その三は、文武不岐。その四は、學問事業、不殊其效。である。

諸冊二尊
伊非諸尊
伊非冊尊

第一の「奉神州之道、資西土之教」について言はう。水戸學の立場からすると、この日本國には昔から道があつたのである。それが即ち「神州之道」である。神代には文字が無かつたから、この道を表現する上に文字を用ひず、従つて道の名稱は無かつたのであるが、道そのものは存在してゐたのである。然らば、その道とは如何なるものかといふに、支那の五倫・五常と同じものである。即ち、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信ありである。例へば、天祖が皇孫に三種の神器をお授けになつたことは何處までも「親」が本になつてゐるので、「親」の道である。苟も神器を御所有になつてあらせられる天皇に對し奉つては、犯し奉る者が無かつたのは、即ち「義」の道があつたからである。又諸冊二尊が御夫婦の道を守らせられたのは、「別」の道に基づかせら

れたのである。かやうに、上代の風習制度を一々調べて見ると、確かに五倫・五常があつたのである。故に吾々も亦此の我が國固有の道を行はねばならぬと説くのである。吾々は又「西土



徳川
京都
西土之教とは、孔孟の教を意味するものである。徳川時代の諸藩の中で、最も多く孔孟の教を

土のそれも、要するに其の揆を一にしてゐると考へたからである。決して無批判的にこれに盲從したのではなくて、獨立的精

神をその根本として、これに他國の文化を取入れたのである。第二の「忠孝無二」はこれを絮説する必要がないから、大略を述べるに止めよう。「忠孝無二」を高調する點にも、水戸學の精神は窺はれるのである。「忠孝無二」即ち忠孝一致といふことは、我が國民道德の眼目である。これ畢竟、上述の五倫の中でも、君臣と父子とが最も重大なものであつて、その間に成立つ忠と孝とは、人の臣たる者、人の子たる者の大道であるからである。元來支那では忠孝一致の教を有しながら、兩者の一致する事實がない。孝經には、「孝を以て君に事ふれば則ち忠」と書いてあるが、それは、單に教の上での一致であつて、實際には成立たなかつた。これは、支那には綜合的家族制度が無いからである。之に反して、我が國にあつては、國がやがて大きな家であつて、畏くも天皇はそ

の大家長にましますところから、天皇に對して忠を盡し奉ることは、そのまゝ、父に對して孝を盡すことであつて、忠と孝とは寸分の齟齬するところなく一致するものである。水戸學では此の點を力説して、忠と孝とは徳川その對象とするところを異に川するも、その基づくところは眞齊昭公心であるとする。即ち「忠孝無二」である。

尤も此の忠と孝とは、やゝもすれば齟齬するやうにも見え、隨つて忠孝不兩全説を唱へる者がある。彼の平重盛の場合の如きは即ちこれである。歴史の上では、重盛は「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」と歎息して、進退兩難に



徳川 昭公 齊順 昭公 心であるとする。即ち「忠孝無二」である。

夏は清しく
凡爲人子之禮、冬温而夏凜、清、昏、定、而晨省。(禮記)

陥つたことになつてゐる。古くから忠孝兩全は吾々の道德上の理想であるが、場合によつては、それが實現せられないといふのが一部の論者の説である。ところが、水戸學では、かやうな議論を許さない。世には往々、常に君側に侍し、眞心を盡すのが忠であれば、この際孝は當然これを盡すことが出來ないと考へるものがあるが、それは誤つてゐる。何となれば、君に對して忠を盡し奉るといふことは、そのまゝで、親に對して孝を盡す所以であるからである。自分が現に立ちつゝある場所で最善を盡せば、それが忠でもあり、又孝でもあるのである。表面が必ず忠ならずば、裏面は必ず孝であるやうに、表面が必ず孝ならば、裏面は必ず忠である。それ故、父母の膝下に在つて、夏は清しく冬は温かにするのは孝子の行であるが、常に親の膝下に在つてかゝる孝

藤田東湖

名は彪

水戸藩士

勤王家

安政二年(一八五五)

歿

年五十

歐陽修

宋代の文豪

政治家

熙寧五年(一〇三三)

歿

年六十六

養を盡しながらも、一國の文教に力を盡して文化の發展に貢献するに於ては、それは君に對して忠である。常に君側に侍して忠義を盡すのみが忠ではなく、絶えず親の膝下に在つて冬温夏清をはかるのみが孝ではない。藤田東湖は、その著、弘道館記述義の中に、歐陽修の「身は其の居に従ひ、志は其の義に従ふ」といふ語を引いて、我等は只其の在る所で義に従へば、それでよいのである。とした。これは、君側に侍して最善を盡せば、それは忠であると同時に孝であり、親の膝下に在つて最善を盡せば、それは孝であると同時に忠であるといふ意味であつて、忠孝に關する水戸學の立場を説き得て遺憾のないものである。

第三は「文武不岐」である。水戸學の立場からすれば、人は文武兼備でなければならぬ。その何れに偏しても、人としての完全な

資格はないのである。我が建國の祖神は文武を兼ね備へて居られた。例へば神武天皇が御東征遊ばされた際、行く／＼皇軍に反抗し奉る者を伐つてお進みになつたのは、即ち武である。然るところ、征戰の事が終るや、大和に都を奠め給うて、或は祖宗の神靈を祀らせ給ひ、或は善政を施し給うた。これは即ち文で

君子和而不同小人同而不和

亮書

蹟筆功天田豊

又、崇神天皇がある。

四道將軍を天下に遣はして教を受けない者を伐たしめ給うたのは、武である。神器を汚すことを畏れ給うて、別にこれを祭らしめ給うたのは文である。後の代々の天皇、亦いづれも武を以て賊を平げ、文を以て民を治め給うた。若し文のみで武を顧み

筆蹟

君子和而不_レ同_〇小人同而不_レ和_〇亮書

四道將軍

崇神天皇の御代北陸・東海・西海・丹波の四道に派遣せられた大彥命・武甕川別命・吉備津彥命及び丹波道主命をいふ。

豊田天功

名は亮水戸藩の儒者元治元年(一八五〇)年六十

ない時には弱となり、之に反して、武を専らにして文を顧みない時には愚となるのである。弱と愚とは之を戒めねばならぬ。此の見地からして、水戸藩では、大日本史編纂にたづさはつた學者に劍道や弓術等の武技を學ばしめた。豊田天功は藤田東湖を稱揚して、「君も文武の全才なり」といつたが、これは固より至言である。烈公も亦文武兼備の名君であつた。

最後に「學問事業、不殊其效」について一言しよう。烈公時代に至つて、水戸學の精神の更に實際化せられたことは、此の文字によつて明かである。學は道を學ぶ所以であり、問は道を問ふ所以であり、事業は道を行ふ所以であつて、三者は互に相關聯してゐる。此の三者の關聯の緊密なるところに實用の學が成立つてゐる。これを今日の言葉でいへば、理論と實行との並進であ

る。理論は實行を俟つて始めてその實を具ふべく、實行を離れた理論は空論に墮するのである。實行も亦理論を背景として始めて確實なることを得べく、理論を離れた實行には成功が伴なひにくい。この故に、兩者は其の效を殊にしないといふのである。

昔から、何れの國にも、學者は必ずしも少なくないのであるが、その事業の後世に聞える者の割合に少ないのは、學問と事業と其の效を殊にする爲である。實際政治の局に當る者が必ずしも道を學ぶ人ではない。これ、其の政治道德を蹂躪して少しも顧みない者があるによつて知るべきである。之に反して、道を學ぶ人は、案外その學ぶところに囚はれて實用の材たることが出來ない。これ亦、學問と事業と其の效を殊にする爲である。戒

朱子學
宋の朱熹の唱へた性理の學

文公
名は治保
文化二年(西曆)
年五十五

立原翠軒

名は萬
水戸藩の儒者
文政六年(西曆)
年八十

藤田幽谷

名は正
水戸藩の儒者
文政九年(西曆)
年五十三

筆蹟

西皇使者昔求
仙。東海神山今
尙傳。不盡香爐
蒸紫氣。削成銀
關。戴青天。陰
崖寒。凝千秋
雪。絕頂晴開八
葉蓮。借問雲中
君在否。臨レ
風試唱羽衣篇。
幽谷居士

むべきである。

西皇使者昔求
仙東海神山今
尙傳不盡香爐
蒸紫氣削成銀
關戴青天陰
崖寒凝千秋
雪絕頂晴開八
葉蓮借問雲中
君在否臨
風試唱羽衣篇
幽谷居士

藤田幽谷筆蹟

かやうに、弘道館記を本として、烈公中心時代の水戸の學風を觀察すると、其處に、義公中心時代と少なからぬ差異が認められるのである。これは殊に水戸學を研究する者の興味をそゝる事實である。義公中心時代には、當時の一般學界の影響を受けて専ら朱子學が行はれたのであるが、第六代文公時代に立原翠軒が新に古學を唱ふるに及んで、これを學ぶ者が頗る多く、英才が雲の如く門下に集つた。中にも、藤

青山延子

號は拙齋

水戸藩の儒者

天保十四年(三三)

三歿

年六十八

筆蹟

暖靄和風雲日

晴。迎人梅樹亂

縱橫。遮前葉

後滿枝雪。萬斛

香中曳履行。

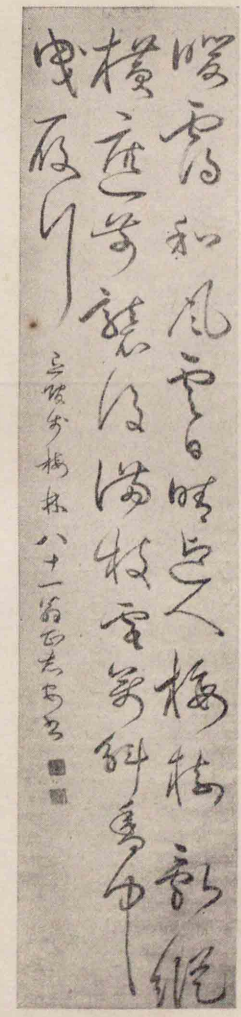
退館歩梅林

八十一翁正志

安書

安書

田幽谷青山延子の如きは、その錚々たるものである。この時分から、水戸の學風は一變して、頗る活氣を帯びて來たのである。一體に、朱子派の學風は謹慎溫粹であるが、活氣に乏しい嫌がある。これに反して、古學派のそれは實行を重んじて、氣魄があり、



會澤正志齋筆蹟

光焰があるのである。此の古學が一たび水戸に入るや、學者は最早單に圖書堆裏に筆硯に親しんで居られぬやうになつたのである。

烈公中心時代は此の勢が一層盛になつた時代であつて、幽谷の

會澤正志齋

名は安

水戸藩の儒者

文久三年(三三)

歿

年八十二

子東湖、門人會澤正志齋の如きは、いづれも當代の代表的人物として天下の仰慕する所となつたのである。この時代の水戸學の精神を文字に表現したものが、即ち弘道館記であつて、その綱領が、即ち以上の四箇條である。

茲に當時の水戸に於ける人物の面目を窺ふに足る話がある。

安政元年二月のこと、西郷南洲は、藤田東湖を訪うて教を乞うた。時に東湖は四十九歳、南洲は二十八歳で、二十歳程も年齢に相違があつた。その時、南洲は東湖に關する第一印象を人に語つて、「東湖は盜賊の親分のやうな人物である。」といつた。しかも、南洲は深く東湖の人物に服し、後、自分は先輩では藤田に服し、同輩では橋本を推す。といつてゐる。橋本とは橋本左内をいふのである。南洲程の人物が斯くまで東湖に服したといふのは、勿論東

安政元年
孝明天皇の御代
(三五四)

橋本左内

福井藩の志士

安政六年(三九)

刑死

年二十七

湖の人格の力が然らしめたのであらうが、吾々は茲に東湖といふ一人の偉人を通じて、水戸學の精神の赫耀たる具現を認めざるを得ない。

斯の如くにして、水戸學は維新の風雲を捲起す原動力となつた。當時苟も天下國家を論ずるの士にして、直接に間接に水戸學の洗禮を受けないものは極めて少なかつた。西郷南洲の外、蒲生君平、高山彦九郎、吉田松陰等は、何れも水戸を訪うた。これ畢竟、水戸學が古學を取入れて以來、著しく實行性を帯び來り、氣魄あり光焰あつて、時代の風潮を指導する力を有した爲であつた。要するに、水戸學はその源を義公に發し、烈公に至つて大成せられたものである。そして水戸學が天下志士の思想精神を支配する思想系統となつた結果は、單なる水戸一藩の學でなく、普く

蒲生君平

名は秀實

下野の人

寛政三奇士の一人

文化十年(一四七〇)

歿

年四十六

高山彦九郎

名は正之

上野の人

寛政三奇士の一人

寛政五年(一四九三)

歿

年四十四

勤王諸藩の學となつて、王政維新の大革新を成就する原動力となつたのである。

今日我が國の一部の同胞の言行を觀るに、日本人でありながら日本を十分に理解せず、古來日本に如何なる道があつたかを知らないものの如くである。言換へれば、日本國の眞の姿相がわからず、日本民族の生命を一貫した道德の存することを知らないものの如くである。この様な流弊を救ふには果して如何にすればよいであらうか。私は、その方法の一は水戸學の精神を知識として知り、信念として信ずるにあると考へる。

水戸學の精神は、その外觀褊狭なやうであるが、必ずしもさうでない。既に「奉神州之道、資西土之教」といふのであるから、基礎根柢はどこまでもこれを日本固有の道に求めるが、之を培ひ之を

育む滋養分は、之を外國の文化から攝取しようとするのである。「忠孝無二」文武不岐」といふことも、個人的には人の人格を完成する所以であつて、國家的には國民を陶冶し統一する所以である。殊に今日、天下の廣居に立つ者には、この二者が無ければならぬのである。私は現實の日本社會の大いなる弊風は、此の「忠孝無二」文武不岐」の心得の無い者が社會の表面に立つ所に基づくと思ふ。最後の「學問事業、不殊其效」といふことも、現代の日本に取つて極めて適切であるのである。かう觀て來ると、現代日本の流弊を救ふ一の方法として、水戸學の精神の研究と經驗とが、最も適切であると思はれる。（思想と國家）

二四 大丈夫の覺悟

幸田露伴

幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
慶應三年（一八五七）
江戸生

大海の百川を
呑む
百川學^{ヒテラ}海而至^ル
于海^ニ揚子方言

大丈夫、苟も身を學藝に委ねんとせば、まづ受發の二途に於て大丈夫の覺悟あらんことを要す。發とは外に内の發するなり。受とは内の外に受くるなり。受くることは須く大海の百川を呑むが如くなるべし。發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし。受くることの多からざらんことを嫌ひて、川の大、川の小を嫌はず。發することの豊かならざらんことを恐れて、方の東、方の西を問はず。これを受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす。受くるに嫌ふところあり、發するに問ふところあるは、女兒の情のみ、大丈夫の覺悟にあらず。受は發の本なり、發は受の末なり。途は二にして實は一。受をよくすれば發は其の中に在り。大賢は能く受く、中才は勉めて能く受く、賤人は好んで受くるあり、敢へて受けざるあり。誓つ

て必ず賤人たらざらんを期する、之を眞に身を學藝に委ぬといふ。受の途に於て工夫刻苦するものは學藝を成すに庶幾からん。受の途に於て大丈夫の覺悟なきものは、爲すにだに堪へざらんとす。何ぞ成ることあらん。

評の性は多く褒貶毀譽を具し、人の情は常に譽を愛し、褒を愛して、毀を惡み、貶を惡む。是に於て毀譽褒貶の我が頭上に加へらるゝや、大丈夫の覺悟なき者、或は徒らに懼れ、或は徒らに驕り、或は人を恨み、或は自ら足れりとして、惜むべし、堂々たる六尺の身、他人に簸弄せられたるを悟らず。人を颺風にし、我を糝糠にす。實に自ら待つの薄きのみならず、抑、また學藝に負くこと多しといふべし。大丈夫豈此の如くなるべけんや。夫れ大海の百川を呑む、大も亦呑む、小も亦呑む、清も亦辭せず、濁も亦辭せず。日

擊壤の歌

日ハ谷而耕、日入令而息。擊壤井而飲、耕田而食。帝力奚在ニ於我。(史記)

舜の詩

南風之薰兮、可也。以解吾民之愠兮。南風之時兮、可也。以阜吾民之財兮。(孔子家語)

に黙々たり、洋々たり、而して、漸く我が大を成し、徐ろに我が大を用ひ、日に活潑々たり、圓陀々たる大作用をなす。大賢の人の言を受くる、亦是の如し。精雜密疎の説、毀譽褒貶の評、皆一齊に之をして日に進ましむるあらんことを願はざる無し。古人まこと此の如し。則ち堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへど、批評も亦堯舜の聖を如何ともするなし。擊壤の歌は誰か堯の徳を傷つくるものとなさん。舜の詩猶存すれども、誹謗の木の文は今何處にかある。

是の故に、學藝に志ある者は能く外に受くる大賢の如くなる能はずとも、勉めて己に克つて人に受くべし。饒舌の分疏は老婆の醜態、逆耳の言に聴かざるは好漢にあらじ。縦令、滿面の垢辱、堪へんとして堪ふる能はず、筋張り、血涌き、劍を抜いて直ちに報

いと欲するに至るとも、亦先づ牙關を咬定して、隱忍し、頭を垂れ、心を虚しくする工夫の裏より、一天地を拓き得て、笑つて、立つて、謝して、牛溲馬勃を我が藥籠中に收むるが如くならんを期すべし。之を大丈夫の受の覺悟といふ。

人貶すれば便ち受けずして胡言亂説し、人讚すれば便ち默受して欣々たる如きは、閨閣の兒女に在つては咎むべくもなし、學藝の士に在つては甚だ鄙しむべしとす。古に曰く、峻谷に入るものは當に葛藟を攀ぢて以て顛墜を免るべし、時俗に處るものは當に道義に據りて而して後、以て自立するを得ん」と。學藝に遊ぶものは當に反求の功に頼るべし、漸く深造するあらん。唯反求の功に頼る、則ち揚げらるゝも自滿せず、抑へらるれば愈奮ふに足らん。

徐子

徐幹
字は偉長
後漢の末魏の初
の人
中論の著者

五十にして

蘧伯玉、年至三十五
十二而知四十九
年之非
(淮南子)

子思

名は伋
孔子の孫
中庸の著者

徐子曰く、今夫れ、身を立つる人の譽むる所とならずして、人の誇る所となるものは、未だ善をなす理を盡さざればなり。善をなす理を盡すものは、將に舜の若くならんとす。舜と同じからずと雖も、それ敢へて之を誇るものあらんや。故に語に稱す、寒を救ふは裘を重ねるに若くはなし、謗を止むるは身を修むるに如くはなし」と。善いかな言や、能く大丈夫の覺悟を説けりといふべし。古人五十にして四十九を非とす。今、我、昨の我を是として後の我に望むなくんば、我の死するや久しからん。

大丈夫當に受發の二途に於て、大丈夫の覺悟を以て立ち、而して學藝に盡すあるべし。子思曰く、能く其の心に勝つ、人に勝つに於て何かあらん。能く其の心に勝たず、人に勝つを如何せん」と。爲す所ありて美とせられず、内に求めずして人に責むる、其の情

